
K-ON <Backroom Story>

グラッド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

K - O N > B a c k r o o m S t o r y <

【Z-IPアード】

Z7609Z

【作者名】

グラッド

【あらすじ】

少子高齢化とか何とかのせいで今年から共学になつた桜が丘高等学校に入学した邑園結祐。

彼にはちょっとした問題があり・・・。
そんな結祐が軽音部のメンバー や、先輩、友達と紡いでいくお話です。

不定期更新、若干キャラ崩壊してるかも、漢字間違いたまにある

かもですが興味が少しでも湧いたら読んでみてください^__^ (—)

第一話 ?PROLOGUE? (前書き)

初投稿です。

感想をいただけるとうれしいです。

第一話 ?PROLOGUE?

いつからだらうへ。

こんな体质になつたのは。

これのせいで俺は中学時代毎日が修羅場だった。治そうとも試みたけどうまく治りきらなかつた。だから、俺はもう決めたんだ。

そう、俺はもう女子なんぞには関わらない！！！

桜が咲き誇り、誰もが様々な思いを掲げて新しくスタートを切る4月。

『彼女を作る』『部活に打ち込む』『受験』『まあ、頑張る』などなど、様々な目標をもち心地よい風に吹かれている新入生の中、今日から晴れて桜が丘高校に入学した俺、邑園結祐はクラスの面々を見て絶望していた。

「な、何でこんなに女子率が高いんだ？」

思わず口に出してしまった。

だがまあ仕方がないはずだ。

だつて、クラス35人中30人が女子なんだし。

ただここで俺が普通の男子と違うのは、喜ぶべきこの状況に絶望しているところだ。

では、なぜ絶望しているかと言うと、俺はメチャクチャ女子が苦手なのだ。

どの位かと言つと、目が合つだけで脳内がフリーーズして頭から煙

を出したちやうくらい「ガテだ。

つーわけで、ガツツリBlueになつていると、クラス内で数少ない希少種であるはずの男子から、

「何でつて、ここ去年まで女子校だつたからじゃない？」

と、まさかの返答が返ってきた。

若干驚いたけど、その声は非常に聞き慣れた

声であり、そして同時に俺をこの状況にしやがつたヤツだと確信したので、俺はにこやかスマイル+額に青筋でその声の主を見（睨んだ）た。

「テメエ知つてて俺をここにいたのか・・・勇利

「まあね～。だつて、女子率90%以上だよ?行くつさや無いっしょ?」

「よく堂々と不純な入学動機叫べんな・・・つて、勇利のそんなことは今に始まつたことじやねえからどうでもいいんだ?勇利、お前俺がメチャクチャ女子苦手なのも、高校ではあまり女子と関わりたくないつて願望も知つてんだろ?」

「だからここに誘つたんじやん!」こなら結祐の女子が二ガテなのも半強制的に治るじやんww

「志望校をお前に相談したのが間違いだつた。そして笑うな」

「まあまあ、でも考えてみなよ、3年間女子と戯れ放題だよ?バレンタインなんか学年女子全員から告られたりしてさ、『ごめん皆、僕はみんなに対等に愛を与える』ことが使命なんだ。だから誰か一人なんて選べないよ』とか言つちやつたりしてさ、そしたらさ、・・・グフ・・くふふふふふ・・・・・・」

この妄想族がと呴きながら勇利の顔をみたが、その顔は気味悪く歪み、すでに俺の悪友篠原有利の顔ではなく不純な考えを膨らませ

た変人、いや、もはや不純物だ。

「こつ絶対彼女できねえだろーな。

・・・・俺もだつた。

なんせ声かけただけでもショートしつつま・・・・

「あの〜・・・」

ボンツ？（ショート音）

「ええ？だ、大丈夫ですか？」

「あー、こりやもうダメだ」

「ダメなんですか？」

「あ、え〜と、じつちの話だよ。それよりも、確か君は平沢憂ちゃんだつけ？」

「あ、そうです！私平沢憂です・・・つて、まだ自己紹介もしてないのになんで名前知ってるんですか？」

「当たり前だよ！」これから一緒に過ごす仲間（の可愛い女の子）の名前と顔くらい名簿と出席番号で確認しておこう。あと、遠慮して敬語なんてつかわなくていいよ

「そつか。でも偉いんだね。きちんと最初に名前を確認しつくんだけ

「いやいや、そんなの（僕の輝かしい未来のために）あたりまえだよ！？」

「ふ、不純な動機が見え隠れしてんのは気のせいか・・・？」

「おお！結祐！いつの間に復活した！？」

情けないが今です・・・なんて恥ずかしくて言えねー。
つつか、どうにかならんかな？この体质つづーか性格。
話しかけられてショートは情け・・・・

「よかつた～～わせませ～～メンね～～」

・・・・あ、謝りなくていいから、話しかけない
！！

ボンッ

「ええ～～また～～？」

「頑張つたな結祐。3秒耐えたぞ」

「い、ゴメン。私さつきからなにが・・・・・」

「ああ、憂ちゃん気にしなくていいよ。これはこいつの体質みたい
なもんだから。・・・・とつ、とにかく、俺は篠原勇利。んでコイ
ツは畠園結祐。僕たちは中学生の時からの友達なんだけど、実は結
祐は極度の女恐怖症つーか、超恥ずかしがり屋？それとも体質な
のか？ま、まあとにかく女子に話しかけられたり、田が合つちやつ
たりするとこんな感じに頭から煙を吹いてショートしつづんだ」「そ、そなんだ・・・じやあ、何でこの高校にしたの？」「去年
まで女子高だつたんだよ？」

「それはまあ、僕が誘つたんだけどさ。女子が多い環境にいれば治
るかな～的な感じで。・・・・・でわつ～～」

「な、なに？」

「憂ちゃんさ、コイシのここの性格みたいなの治すのに協力してくれ
ないかな？僕ここにいるけど実はこのクラスじゃないからさあ～。
お願いつ～～！」

「（ええ～～クラス違うんだ！）う、うん。い～よ。席も隣だし」

「それじゃあ、憂ちゃん～後は頼んだ～～！」

「え、ちよ、ちよつと・・・・・」

「そ、そだ勇利～～ちよつと、ちよつと待てえ～～」

と、言いたいのにショートして身体が動かない～～

くそお、勇利め、何で男子じゃなくて女子に頼むんだ！？

「あの…………」

「だあ…………それ以上なんも言わないで…………と、とにかく勇利が変な」と言つて「ゴメン！ それと、改めて俺は邑園結祐。よろしくな平沢」と憂でいいよ。こちらこそよろしくね結祐くん

「下の名前で呼ばれた…………」

「ん？ 何か言つた？」

「なにも言つて ボンツ…………」

「ええ…………」、「ゴメン結祐くん。私今度はなにがまづかったの！？」

「ううして、女子が得意じやない俺の、元女子高での『甘くなくて、ほひ苦い』…………要は苦いだけの青春がスタートしてしまった。

第一話　？部活見学…？？（前書き）

戸惑いながら書いてます。

至らない点あつたらお知らせください。

また、感想をいただけるとそれを励みにして頑張りますーー！

第一話　？部活見学…！？？

俺、邑園結祐（15歳）は女子が一ガテといづ非常に残念な男子（b>篠原勇利）らしい。

しつかあ～し…

俺は進化した…！

「結祐くん部活決めた？」

「まだだけど、憂は？」

「私もまだなんだ。だから、今日の放課後部活見学に行かない？」

「見学かあ、俺も部活はやろうかなあと思つてたから一応大体の部活は行つたんだけど・・・。先輩が全員女子だから部員が多くなる部活は厳しいし。運動部じや試合に出れないしき」

「そつかあ・・・。あーじやあさ、お姉ちゃんのいる軽音部に行かない？」

「軽音部つて着ぐるみでチラシ配つてたやつ？つか姉がいるんだ」

「うん。一ワトリとかの着ぐるみで頑張つてた部だよ。あ、でも心配ないよ。お姉ちゃんはふわふわぽかぽかしててすごく可愛いからきつとおもしろいよ！」

「軽音部じゃなくて憂の姉ちゃんが？」

「うんっ！・・・も、もちろん軽音部のほかの先輩もいい人だし、おもしろいよ！」

「ふうん。じやあ行つてみるか」

「うん！じゃあ私、他の友達も誘つてくれるね

「おお、つよ～かい」

そう言って俺は歩いて行く憂を見届けた。

この会話と見送り、会わせて約5分。

入学して1週間。

憂のおかげで、俺は限ねえ会わなければ5分は喋れぬよ!ひになつ

た。

ただし、喋り終わると ボフンーー

「・・・セレセー。畠園くんが頭からむつ出しまーす

しょ、シヨートシサカ。

？？？？？

と、いう訳で放課後。

俺は憂とその友達の鈴木 純すずき じゅんと一緒に軽音部が活動している音楽室へ向かっていた。

・・・・一緒にここは少し離れて歩いているナビ。
だつて・・・

「結祐はなんどそんなに離れて歩いてんの〜?憂で耐性ついたんじ
やないの?」

「それは憂限定なんだよー!そしてこの名前で呼ぶなー!俺を見るな!ー
!」

「えへ、いいじゃん結祐へ。私のことも純でいいからさあ シュウ

そういうながら近づいてくる純。

後ろで憂が「じゅ、純ちゃんそのへんにしておかなこと・・・
といつてるがお構いなしだ。

俺だつてそれを黙つて見ているわけじゃない。

即座に後ずさりを開始！！

したかつたが、既に『会話をする』『下の名前で呼ばれる』『田
があつてしまつた』の3つの攻撃により、HPが残り少ない俺はけ
むりさえ出でていないものの、身体の主導権がもう無かつた。

ど、どうすれば・・・！？と、そういうついでに、ついに
純が俺の目の前に立つた。

それだけならなんとか耐えられるものの、田を逸らして下を向く
俺を覗き込んできたんだからもうアウトだ。

くつ！耐えるんだ邑園結祐。

お前は進化しただろ！

耐える耐える耐える耐える耐える耐える耐える耐える・・・・・・
・・・。

そう呪文のように脳内で反復している俺などお構いなしだと言わ
んばかりに純は再度俺の目をジッと見つめた。

が、脳内反復していく反応のない俺に飽きたのか

「なんだあー。大丈夫じゃん。つまんないな～」

と、ついに覗き込むのをやめた。

丁度その瞬間。

俺の身体に異変が起きた。

一方、俺の反応の薄さに飽きた純は大きなあぐびをしつつ憂を見
たのだが、

「じゅ、純ちゃん………….」

「え?..びついたの憂?..」

その憂の青ざめた顔と、指差す手の震えに異変を感じ急いで再度振り返つた。

また、純が再度振り返るまでの短い間に、ショートするのを我慢した俺は（恥ずかしからなんやうの）消化不良が起きて、

・・・・・ ぽたつ。

「『ぽたつ』? 何の音?..」

「・・・・・ ぐつまおつつー..」

口から血を盛大に吐き出した。

「吐血う!..あ、『ぽたつ』って血のたれた音か~」「純ちゃん納得してると場合じゅ・・・」

「へえ~、やつぱり結祐はおもしろいね。まさか、ショートで済まないくらいの攻撃加えると吐血するなんて~」

「あ、悪魔だ。純は癖毛の悪魔だ・・・うつー..」

「ちやつかり名前で読んでんじやん」

「お前が呼べって言つたんだ・・・・ ぐふつー..」

「意外と純粋か!..つていうかあんま無理しないもつがいいよ」

「それ純ちゃんが聞えることじやないと呑つよ・..。結祐くん、保健室行く?..」

「だ、大丈夫。それより音楽室行つよ」

「そうだね。そうだ、結祐歩くの手伝つてあげるよ~」

ぱしつ（純が俺の手をつかんだ音）

• • • • •

あれ？ 反応なし？

「……………」

いや、これでやめるつもりだったんだけど……ついに覚醒し

たの

「あが
・
・
・
・
」

「『あが』？」

「...」
...」

とおもてられて見れば

「「結祐（くん）！」」

「お、お花畠と手招きしている少年が見えた！」

「ごめん、あたしか悪がつた」

謝るなら最初からやめてくれ。
もう手遅れなんだよ・・・・・グスツ。

「本当に大丈夫? 結祐くん」

「ああ。ただ、いつから音楽室まで少し離れて歩いてくれたりすると助かる」

「合点了解です! !」

「純は視界から消えるくらい遠くを歩いてくれると俺は喜ぶわ」

「う・・・それはひどい」「こでこ

「嘘だよ。ほら行こ。まづ、憂、純」

「うん。やうだね。行こうか純ちゃん」

「うん! 軽音部ついにカッコ良くなったな~」

・・・・俺への罪悪感はもう消えたんかい。

と、ついささりつつ俺は憂と純が歩き若干距離が開くと再び歩き出した。

・・・・・ほとんどこんな感じの学校で3年間生きていくれるのかな、俺・・・。

? ? ? ? ?

ついに音楽室につってしまった。

ま、正確には音楽準備室だけど、軽音部の活動拠点なのに変りないな。

正直なところ、俺はここ数日の部活見学でいに事は一つも無かつた。

というか、割と最初の段階で精神が冥界にトリップしてしまったので記憶がない。

なので部活の雰囲気なんかは俺を散々振り回してくれた勇利に聞いたんだけど、『結祐つてば終始一回一回して一言もしゃべらないもんだからよっぽど感動したんだねwww』となぜか見学内容では

なぐこんなふざけた」と言いやがった。

その時は『つつか、そもそも質問の答えになつてねえよ』ヒツヒツを入れることすら忘れてたなあ・・・。

もううんそのあと**有利**はキチンと成敗したけど、結局話しへ聞けずじまい。

覚えているのは意識が戻るたびに再び冥界に引き込まれるといつ無限ループのみだけで・・・・思に出したら気持ち悪く・・・・・つええ。

といついでぶつちやけ軽音部に行くのも嫌だし、部活に入るつもりも全くない！！でもまあ憂の好意を無駄にするわけにはいかないー・といつ今まで来たけども、

「結祐くんドア開けるけど大丈夫？」

「だ、だだだだ大丈夫」

「結祐。深呼吸、深呼吸」

「すーはー。すーはー・・・

「それじゃあ開けるね」

憂はそつて扉を押す手に力を入れる。

親父、お袋、結祐はこの軽音部から必ず生還して見せます！！

「「「失礼しまーす」」
「あ、憂ー」
「憂ちゃんじやん」
「こりつしゃーい」

中には3人の先輩がいた。

一人は憂に瓜二つだが髪の毛を肩のあたりで切りそろえているところとそのいかにも天然っぽいオーラだけは憂とは違った。しかし髪の色といい、顔立ちといい、異常なほど似ているなあ。恐らくこの人が憂のお姉さんなんだろう。

もう一人はソファーで寝つ転がっていた。

特徴を述べるならば、おでこ。

力チューーシャで前髪をあげているからおでこが見えるのは当たり前なのだが、なんだかそれ以上に何かを訴えかけてくるおでこだった。

あとは、なんかはきはきしていそうなオーラがにじみ出でている気がした。

それにして、ソファーで寝つ転がってる先輩からははきはきしてそうなオーラが出るとは。

もう一人はティーカップを持っているおとなしそうな先輩だった。ただ、特徴は山ほどあった。

まずは綺麗な金髪の髪。

天然パなのかパー、マかけてるのかは不明だけど、フワフワした長い髪はどこかの王族を思わせるようだった。

次に雰囲気。

とても一つ上の先輩とは思えない寛大な雰囲気というか、とにかく大人の女性を思わせるような雰囲気だった。

そして極め付けには・・・・・まゆげ。

俺自身極め付けにまゆげを持つてることに違和感MAXだけど、このたくあんのよつたな太く整ったまゆげを無視できるものはいないだろう。

幸い3人とも憂のほうを見ていたので先輩たちをちゃんと見るこ

とができたが……………親父、お袋、俺は短い人生だつたが悔いは無いよ。もしもこの軽音部から生還できなくとも……？

と冗談はほびほびにしておいて。

さて、先ほどリポートしたとおり、中にいた先輩方は全員可愛かつた。

うん。それは認めよ。でも何故にメイド服！？

「お姉ちゃん、部活見学なんだけど……」

「うん入って入って～」

俺の心のモヤモヤを無視つて奥の机へと通す平沢姉。

・・・・心の声を無視つて当たり前か。
そう自分で自分にツッコんだ瞬間。

「逃がさないわよお～！！！」

「いやああああああああああああああ～！！！！！」

という声とともに何かが通り過ぎた。

人・・・・だよな？

「あはは。さわちゃんあのクリスマス会以来、自作の服着せるのが
趣味になっちゃって」

「そ、そりなんだ～」

憂、顔が引きつってるぞ。

つつが、口口軽音部で合ひてますよね？心配になつてきたよ俺。

そんな俺の気持ちとは裏腹に笑顔で席に俺たちを着かせる平沢姉。ちなみに俺のHPは「」まで奇跡的にノーダメージだ。

「ムギちゃん。これを運べばいいんだよね」

「ううよ。熱いから気をつけてね」

「どうやらお茶をくれるらしい。」

本当にここに軽音部・・・?

そう思いため息を軽くつきつづつ平沢姉をちらりと見ると。

カタカタカタカタカタカタ・・・・・・

ティーカップが踊っていた。

とんだ不器用さんだな平沢姉。

と、その時

「あー。」

ついに平沢姉の手からティーカップが飛び立つた。

「まじかよーー！」

そう言いながら俺はなんとかカップを受け止めた。幸いいい感じに垂直に落ちてきたので中がこぼれることもなかった。

「せ、セーフ」

「おおーーありがとねー

そういういつつ軽くお辞儀をする平沢姉。

の瞬間、まつたく、氣をつかでぐだきこよーんといふ顔でしゃらりと黙つたそ

「お姉ちゃんお盆斜めにしてダメ?」「え?」

え?
」

その気の抜けた返事の直後、ガシャン？といつ音と共に俺の頭の上にティーカップが逆立ちした。

まあ、要は頭の上に盛大に紅茶がこぼれた。
しかもいたてのアツアツのやつが。

「おつかいいいいい？」

と言つた時には既に俺は水道に向かつていた。

• • • • •

俺の脳内データベースに問い合わせてみたが、どうやらショート以外で頭からけむりを出すのは始めてらしい。

「この場合は頭は頭でも頭皮からだけどな。」と自分で自分に勝手に訂正をいれたその時、すつとタオルを渡された。

顔を見ていないから確証は無いけど多分平沢姉だろう。

とりあえず頭も冷やされたのでタオルを受け取り頭を適当に拭つた。

・・・・なんだるうへこの気まずい感じ。
もしかして、みんな俺の顔色窺つてる・・・・?
とにかく何か言わなくては!!!

「え、えーと・・・・だ、大丈夫!俺、頭からけむり出すの慣れて
ますから!!!」

しーん・・・・。

し、しらけた!!
一体どうすりゃあいいんだ!?
一応場を和ませるための渾身のギャグだぞ!!!
頼む!誰か笑ってくれ!!!

「・・・・大丈夫?」

「はい。大丈夫です・・・・グスツ」

一度もショートしたわけじゃないのに、俺の心はズタズタになつた。

第一話 ? 部活見学ー！ー？？（後書き）

次回は
・
・
・
・
・

『じゃあ、改めて部員紹介といふかあ――――』

え・・・。そ、それはちょっと・・

『そう言わるとなおさらやりたくなるのが人の性ですよ』

先輩まさか・・・男!?

「NFG」期待！・・・・・といひて、期待してくれるとうれしいです！！

次回、【部活見学？】

第二話　? 部活見学ー！ー？？（前書き）

第3話。

どうぞー！

第三話　？部活見学…？？

「じゃあ、改めて部員紹介といへかあーーー！」

おでこが印象的な先輩のその一言でやつと本格的に部活見学になつた。

できればもうじょと早くそつして欲しかつたけど。
頭と心がひりひりする・・・。

「それじゃあ、まずは

「はいっ！－りっちゃん隊長－」

「む、何だね？唯隊員！－」

「まずは、1年生に自己紹介して欲しいです－！」

「それは確かに、それじゃあ名前を教えてくれ－！」

そう言つておでこの印象的な先輩（以下おでこ先輩）が純を指差した。

あまりのハイテンションに純は若干たじろいでいた。
俺が最初だつたら絶対答える前にショートだな。

「えつと、鈴木純です」

「鈴木さんな。それじゃあ次！隣の男子！－・・・・つて男！？」

「今年から共学になつたんでいても不思議ではないと思いますけど
「なにい！－今年から共学だつたのか！？」

「私も知りませんでした。りっちゃん隊長－！」

「わたしもです。りっちゃん隊長」

おでこ先輩に平沢姉&金髪の先輩が乗ってきた?
自然にこれが成り立つとは・・・軽音部、恐るべきギャグ線。

一応この辺で補足しておくが、俺は未だに田線を適当なところで逸らしているからなんとかノーダメージだ。

「ところで、共学つていつ驚愕の事実も判明したところで、自己紹介続けていいですか？」

「ああ、いいけど。今のつて狙つたのか？」

「狙う？ 何をつすか？」

「むむ、自然にダジャレが出来るとは恐るべき新人生！…」

「・・・始めていいですか？」

「ああ。悪い悪い。いいよ」

「えへ、邑園結祐です」

「邑園君な。それにしても、何でわざわざから田舎を合わせないようこしてゐるんだ？」

ギクッ？

ば、バレてた？

くっ、このままだは危険だ。

その一心で俺は憂に助けを求めるべくアイコンタクトを図つとした。
した。

のだが、そこで気がついてしまった。

アイコンタクトなんてしたら、俺ショートじやね？

完全に退路は途絶えてしまった。

・・・ええい？ ままよ？
むづなるようになれだ？

「べ、別に逸らじてなんかないですよ」
「ふーん。じゃあ私の田をしつかり見てみてよ
え・・・・。そ、それはけよつと・・・・

なるようになまかねえええ？
やつぱンジパーークは辛えよ？

と、俺の心が涙でいっぱいになりかけたその時だった。

「あ、あの？」

憂にいにつ？

ナイスタイミング？

やつぱ持つべきものは最高の友達だね。

「結祐くんは田が合つたり触れられたりすると、なんて言ひかおも
しうことになつちやうからあんまりやめた方が・・・・

「おもしろこと？」」「

憂、俺が送つた褒め言葉を返せつ？

余計食いつこちやつたじやんか？

「ふーん。おもしろいことか~

「ちょ、のぞきこまないで！ホントこせばいですかーーー。」

「やつ言わるとなおさらやりたくなるのが人の性ですべーーー

そう言つて俺を覗き込んだおでこ先輩。必然的に目があつてしまふ。

「アレ? 目があつてんのこ・・・?」

「なんだ大丈夫じゃん。憂ちゃんも大げさだなあ」

俺はショートしなかつた。

何で?どうして? Why?

全く意味不明だつた。

考えられるとすれば・・・・・

「先輩まさか・・・男!?」

「んなわけあるかあッ！！」

「ですよね。じゃあどうして……？」

「治つたのかな・・・？」

かんだ。

そう俺が首をかしげると、おでこ先輩が急に俺の顔をガツチリつ

一瞬この場にいる1年生が全員ヤバいと思ったがまたもや平氣だつた。

何
で
だ
?

謎が深まつてしまつたので再び首をかしげようとしたのだが、そのとき急におでこ先輩の手に力が入つた。

「状況が読めないけど、そんなに目が合つてヤバいことが起つたはずなのであれば唯を見ていればいいだろー！…」

「…・・・は？」

いやいや、読めないのはあなたの脳内ですよ。
と、ツツコミを入れて居る間におでこ先輩により無抵抗な俺は無理やり平沢姉の方に顔を向けられてしまつた。

そして、不覚にも目があつてしまつた。

「なんだ、やつぱり平氣じやないか」

そうおでこ先輩が言つた瞬間。

ボンツツー！…！

俺の精神は冥界旅行へ出かけてしまつた。

？？？？？

「おーい。大丈夫かー？」

「つねわつー！」

目が覚めると田の前におでこ先輩がいた。
でも、またまたショートしなかつた。

「どうやら」の先輩のみ大丈夫らしい。

「いやー、いきなり頭からけむりだして机に突つ伏したりやつもんだからビックリしたつづーの」

「す、すいません。体质つづーか、どうにも出来ないモンなんで「らしいなー。憂ちゃんから聞いたよ」

「そう言えば、憂と純は？」

「もうとつぐに帰つたよ。惜しくも一人とも確保できなかつたけどなー」

「そうすか」

そう言いながら俺は窓の外を見てみた。

確かに西口が差しこんでるし、きれいな夕焼け見えりやつてんな。つたぐ、どんだけ気失つてたんだ・・・なっさけねー。

「んじゃあ、俺もそろそろ・・・」

「「「ちよつと待つた——————」「」「

「ええ！？憂たち帰つちゃつたし、俺見ての通りショートしちやつから部活に入るのなんて無理つすよ！」

「そんなのは百も承知だぜ！..だから私しか喋つて無いんだが？」

「た、確かに・・・」

「こつちはこつちなりにショートをせなこよつてんんだから、自己紹介と演奏聞くぐらこいいだら？」

うな。
「あんまりこじとどまる理由として成立していないよ

でも長く居座つちやつたし、それぐらいは聞いて行くのが礼儀か。よしつー今度は絶対ショートしねえぞ！..

「わかりました。俺も流石にそのまま立ち去るのは気が引けるんで」

卷二

「まずは、我らが軽音部の源！お茶とお菓子の提供者であり、キー
ボード担当のお嬢様！…琴吹紬！…」

「どうも、琴吹紬です」

ぐ
う
！
！

耐えろ、耐えるんだ俺。

大丈夫。俺が見ていいるのは田じやない、あの整ったまゆけだ！！

「競争」、「競争の構造」。ファンタジアの構造は、アーティスト

—シスト！！秋山澪！！

一一一

「よろしくです」

水工元論

長い黒髪も、しつかり者そうな顔立ちも、全部のパートが共鳴し合っているような感じがする。

ファンクラブがあるのも納得だな。

「さて次は、我らが軽音部のギター担当にしてメインヴォーカル！そして憂ちゃんの姉でもある、平沢唯！！」

てくれてありがとうね

「い、いえいえこちうらさん……」

容赦ねえええ！！

悪気は無いんだろうが、そこまで真っ直ぐ見られると悪意しか感じねーよ……

うう……。

意識が飛びたつ……。

「ほひ、唯それくらいにしておけ。それ以上やつたら田園君また氣絶しちゃうだろ」

「はつ……忘れてた……祐くん」めんね。そしてありがとね澪ちゃん

やん

「それじゃあ、意識が朦朧としてきたところで私の自己紹介いくぜ」

「……」

「ど、どひ・・・・ぞ」

「私は、頭脳端麗・容姿明快！脳部の創設者でもある――――

――田井中ひづ――」

「あの・・・・」

「ん？ 何だね邑園君

「『頭脳端麗・容姿明快』って頭脳明快・容姿端麗の間違いでは？」

「い、細かい事は気にするな……それじゃあ、自己紹介も終わつたといひで演奏いつてみるか――――」

田井中先輩のその一声で全員が持ち場につく。

・・・・案外カツ」「いいな。

「それじゃ、こぐわー！ 1・2・3・4――」

？？？？？

演奏はそこまで凄いわけでは無かつた。
音楽知識がほほの俺が聞いてもお世辞にもうまこと言えるもの
で無かつた。

なのに俺は物凄く感動していた。
みるみる音楽に引き込まれていった。
聞いてる間は目があつたりしたけど、ショートする」とすら忘れてた。

演奏が終わつたその瞬間。

俺は惜しみない拍手を送つていた。

その行為は意識的にやつたといつよりか、反射に近かつた気がした。

「拍手してくれてるってことは、それなりに良かつたってことか？」「いいえ！あんまりうまくありませんでした！！」「え？」「」「」「

場が凍りついたのがわかつた。

でも夢中になつていて、気の利いた言葉が浮かんでこなかつた。

だから、俺は今自分が感じたことと、自分の思いを素直に伝える
ことにした。

「でも・・・・」

「でも？」

「引き込まれました。何度も何度も平沢先輩や秋山先輩とも目があ

つたけど、シートあるじを忘れていました。それへりこで込
まれましたーー。」

その言葉を聞いて一気に先輩方の表情が明るくなつた。

が、俺の話はまだ終わっていない。

この次の言葉が一番いいはずらしいけど言いたかった。

若干、沈黙が続いた。

そのあいだ俺の心拍数はどんどん上がった。
もしかしたら駄目かな？とも思った。

けど、帰ってきた言葉はいたつてシンプルだつた。

第二話　？部活見学！？！？（後書き）

次回は・・・・・

『ぐつ・・・やつぱり判断ミスだったのか！？』

『お、俺一人・・・！？』

次回、【新歓ライブ！！】

・・・・・多分一話で収まるはずつ！！

第四話　？新歓ライブ！！ - 前編 - ？（前書き）

一話で収まりませんでした（：・：）

近いうちに後編も投稿できる様に頑張ります！！

感想をくれるとうれしいです！！

それでは4話でいざ（<O>）／＼

第四話 ?新歓ライブ！！ -前編-

入学してから8日。

俺、邑園結祐が軽音部に入部した次の日。
未だ多くの新入生が部活を決めている最中の今日は、実は軽音部の命運を懸けた日だつたりする。

そう、今日は・・・

「新歓ライブだあ————!!」

「アラカルト」

「よしー。それじゃあおまえは

「アーティストのためのアート」

そう言つて田井中先輩やひらさ・・・ま、秋山先輩以外はお茶用（？）テーブルに座つてしまつた。

新歓ライブ
要は新入生歓迎ライブとは俺を含む今年入

学した新入生を歓迎するための名前のまんまのライブだ。

ジだと俺は思つ。

なのに・・・

「何やつてんだ〜? ヨウ。こっちに来いよ」

「おい律！」

「ノーマル」は、20世紀後半から21世紀初頭にかけて、日本で最も一般的な言葉の一つでした。

「唯まで！」

「まあまあ澪ちゃん。とりあえず紅茶でも飲んだら？」

ああ
あいかどニ丘ヰ：・・・・・すす」

卷之三

- !

唯一の仲間だと思ってた秋山先輩が手なずけられたッ！！

お茶やお菓子は確かに必要なかもだけど、本番前はさすがに自粛してくださいよ・・・。

「ほら、何やつてんだ？早く来いよ、コウ！」

うみー？「そ二たよゆーくん 累かゆーくんのふんのクッキーまで食へちや

く！」の部に勢いで入部したのは半端ミスたったかい。それより先輩たち練習とかなくていいんすか？」

「そ、うだぞコウ。私たちはお茶しないと演奏できなんだと？」

「處張って言わなくてください。三つから入部した途端に妙なアタ
名で呼ばないでくださいよ」

「ええ、ベツドーリー、いじかん、ゆーくんで、
ジ、うー、吉古、うー、ツーフ、コバ、平、ヅ、タ、ハ、

「いや、もうこの問題じやうじやうだよ。」

俺がそう言いながら呆れた様にため息をついたそのとき。

モンモンシ。

音楽準備室の扉が誰かによつて叩かれた。

誰かはわからないが、お茶中の先輩方は全く動きそうがないので
とりあえず俺は扉を開けてやつた。

「はいはーい？どなたですかい？」

「あ、生徒会の真鍋和まなべのじかですけど、部長・・・と言つたか律いるかしら？」

「田井中先輩お呼びでつせ～」

「ほいほいー」

そういうながら田井中先輩は真鍋先輩と廊下に出て行つた。

それにも驚いた。

扉を開けたら女子とか・・・ゾッとしたわ。

最近ものすゞく目を逸らすスピードが上がつてゐる気がする。

・・・それつていいことなのか？

と思いつつ、振り返ると目に入つたのはクッキーを食べる先輩たちだつた。

はあー。

こんなんで新歓ライブ平氣なのかよ？

そう呆れながら伸びをして、ため息をつきながら下を向いた。

すると、琴吹先輩がいつの間にか俺を見上げていた。

・・・・見上げる？

俺は見下ろす。

つまり、目が合っちゃってる？

そう自覚した瞬間、

「～～～～ツ?」ボンツ?

と、俺は頭が爆発したようにけむりを上げその場に倒れた。

琴吹先輩はそういうJとしないと思ったのに・・・・

ていたその時、俺は人の好奇心の怖さを知ることになった。

一方そのころ、私は田井中律は和から今日の新歓ライブの説明を受けていた。

「へーい」と、さういふ顔だから、みんなにも伝えてね。」

「伝える」とちゃんと覚えてるわよね?」

一大丈夫！！なぜなら私が田井中律だからッ！！！」

せよ」と心配ね
まあでも
さすかに律

”さうかは” てどういふ意味だよ、ま田井中さんは

「それじゃあ、よひへじくね

そう言つて持ち場に戻ろうと踵を返した和を私は見送つた。

さて・・・・なにを伝えるんだつけ?

忘れちゃったZE

つて言つのは「冗談で、マジでなんだっけな？」
と、つこさつきかわした会話を思い出しながら私は部屋のドアを開けた。

すると、田に入ったのは、

畠田をむこて倒れているコウと、それを笑顔でつつくムギと誰だつた。

「あ、りっちゃん！ ゆーくんす！」 いんだよ……
「そりなの！ 結祐くんどんなにつついてもビクともしないの……まるで石像みたい……」
「や、や……め……。意識が……と……。
ぶ……」「
・・・・・地獄絵図？

つてか、コウ『やめて』つて言おうとしてるじゃん。
なのに、ムギも唯も……。

一体私がいない間に何があつたんだよ！？

「お、おい澪」
「どうした？ 律」
「澪はこれを見て何とも思わないのか？」
「んー……」

澪はそう唸つたあと、テーブルに乗つているクッキーを一つ頬張りながらいたつて冷静に私に言つた。

「多分、これが軽音部の日常に加わると思つからこちこち驚いてた

「うきこがないかなーって」

「…………ついにここまで」

「つたぐ、マジでやめてくださいこね。田井中わすのも触れ合つたりするのも俺ダメなんすから」

「「めんね。ついやりたくないつちやつて」

「はあ・・・頼みますよホント」。ついで、田井中先輩。さつきなに話してたんですか?」

「聞きたいか?」

「もつたいぶらないでくださいよ。どつせ新歓ライブ関係でしょ?」「やつだぞ律。私たちなんだかんだで本番前なのにまだ練習してないだろ」

「しようがないな~。教えてやるつー。楽器や機材の搬入だが・・・」

私が講堂許可証とか出し忘れたせいで生徒会は手伝えないそつだ!」

「そんな!?りつりやんそれじゃあ・・・」

「ああ。アンプもドラムも自分たちで運ばなくけやいけないな。・・・くつー一体誰のせいでー?」

「お前のせいだろ律」

「・・・・てへつ」

「てへつ じやないーーどつするんだよ?本番まで時間無いんだ。まだ通しの練習もしてないのー・・・」

「やつね、衣装こも着替えてないしな

「「「「「わちやつー!」」」

やつ先輩が声をあげて見た先には、誰もいなかつたはずなのに

つの方に女性が座っていた。

“わわちゃん”と呼ばれていたが、確かに音楽教師の山中わ子先生……だった気がする。

生徒の間でも若くてきれいな先生で通っているらしい。

勇利曰く『あのスタイル！あの笑顔！長い髪！そして眼鏡！…全部が大人の女性って感じを引き立てる！…』 そうだ。

実はそのあと『いや～。生徒と先生の禁断の愛なんてのも…』と、アホみたい（実際アホだが）な事を言っていたので成敗したが…まあそんな回想は今必要ないだろ。

と、血の脳裏から既々しい勇利の記憶をもみ消していると、

「あ、あなたが新入部員ね」

と声を掛けられた。

突然だったのでもちよつと驚いたが、ショートはしなかつた。

女子に困まれてるつて言う最悪の環境のおかげだろうか…？ そう考えると思わず苦笑いがこぼれてしまいそうだったので、そのまま返答をすることにした。

「えつと、畠園結祐です。たしか、山中先生でしたよね？音楽科の」

「あら？ 血口紹介はいらないみたいね」

「まあ、一応先生方の顔と名前は覚えてますから。んで、その山中先生が軽音部に何の用すか？」

「ふつふつふ…見て驚けつ…」

そう言って山中先生が机の上に出したスケースの中には、チャイナドレスが入っていた。

チャ、チャイナドレスだとシッ……とまではいかないが、少し驚いた。

でも、これを見せてどうするんだ？

そう俺が思った瞬間。

「「「カツ」」」」」」」」」」

田井中＆平沢＆琴吹先輩が身を乗り出して叫んだ。

・・・俺的には服よりこっちのリアクションの方が驚いたわ。

「さわちゃんこれも作ったんだよな？」

「そうよ～。大変だつたんだから」

「ふーん。作つたんすか・・・・・つて作つたあ！？これを！？」

「モチロン！私ほんなん服だつて作れるわよ！」

「そうだよ～。ゆーくんが部活見学しに来た時私たちが着てたメイド服もさわちゃん先生の手作りだよ！」

「へ、へえ・・・・・」

恐るべき、山中さわ子！――

メイド服とか、チャイナドレスとか、並の人間じゃ作れねーぞ・・・

。

「ところで先生。コイツをどうするんすか？」

「なに言つてるの？着るのよ。唯ちゃんたちが

「・・・・・は？」

「これを先輩方が着る・・・？」

「ちょこっとチャイナドレスの先輩を想像してみた。
まあ、もともと美人だし似合わなくはないな。」

ただ、ちょっと着せるのは無理じゃないかと俺は思った。

何故なら、秋山先輩が山中先生登場から責められて動かないからだ。
なんで責めているかは分からぬが、先生登場と同時だったの
で「このチャイナドレスが関係していることは間違いないだろう。」

例えば 着るのが恥ずかしいとか。

俺がそう思つたときだった、

「れ、練習しようつーーー。」

急に秋山先輩が立ち直つた。

「ほ、本番まで時間無いし、急いで練習しようつーーー。」
「そんなこと言つて。着たくないだけなんじゃないか？澪」
「そ、そんな事はない・・・・・ような・・・・・」
「やっぱそうじやんかー。まあ、それまで詮つぱなうる澪は着なきゃいいんじゃないか？」
「え・・・？」

「そうだよ澪ちゃん。無理に着なくていいんだよ？」

「そうね。澪ちゃんは恥ずかしがり屋さんだしね」

「私も、せっかく作ったものを着てもらえないのは残念だけビ、澪

ちやんのためなら涙をのむわ

そんなみんなの励ましで秋山先輩は徐々に表情を明るくしていき、

「み、みんな・・・・・」

そう呟いたときには感動で涙目になりかけていた。のだが、

「ま、でも一人だけ制服つてほつが帰つて目立つかもな」
「そんなの嫌だああああーーー！」

どん底に突き落とされた。

うんうん。

これが噂の『持ち上げといて突き落とす。持ち上げられた時ほど痛みは強い。』の”ちやほやの法則”か。

そう目の前で起こったことを考察していると、ふと山中先生の腕時計が目に入った。

現在の時刻は12：25。

新歓ライブは『新入生オリエンテーション』要は部活紹介の中に組み込まれているから、集合時間は13：00。

今から通しの練習に・・・確か3曲とか言つてたから多く見積もつて大体20分くらい。

先輩たちの着替えと身だしなみに多く見積もつて10分。楽器類、必要な機材を運ぶのに短く見積もつて10分。合計40分・・・・。

時間が足りねええツツ――

その驚愕の事実に気がついた俺は先輩たちを見たが、相変わらず
「あきやあきやあ騒いでいた。

・・・本来は右も左も分からない新入部員が偉そつな」と言つべ
きじやないんだろうが、事態が事態だ。
迷つてられるか――

「先輩――」

「――「ん?」」

「ん? ジやないつす――あと本番まで35分しか無いんすよ――。」

「大丈夫だよゆーくん。まだ35分もあるから」

「じゃあ聞きますけど、琴吹先輩、最後の通しの練習するのに何分
かかります?」

「20分くらいじやないかしら?」

「じゃあ先生。先輩たちの着替えに何分かかりますか?」

「チャイナドレスだからちょっと私も手を加えたいし・・・10

分くらいじやないかしら?」

「次、田井中先輩。楽器運ぶのに何分かかりますか?」

「私たちだけで運ぶからな・・・・頑張つても10分はかかるんじ
やないか?」

「それじゃあ、平沢先輩。練習、着替え、運搬、合わせて何分かか
りますか?」

「えと・・・・40分かな?」

「それじゃあ、秋山先輩。本番まで何分でしたつけ――?」

「35分・・・・つて」

「――「間に合わないじやん――。」」

「ここまで来てやつと氣付いたんかい・・・・。」
つか、俺の予想ドンピシャだつたな。

二二か 俺の予想トシニシヤ た二 たな

ま、とにかく先輩たちはやつと気がついたみたいだし、練習時間でも縮めれば・・・・

「つっちゃんがいしょーー? 私一回本番前に通わないと分かんなによーー。」

確かにそうだな。私もちょっと心配だな……

—なんだかんだで

「じゃあ、やつぱん練習は縮められないよな……」「もんね……」

なつにいいいいいいいい！？

くつ！ うなづやあ・・・・・

「じゃ、じゃあ、制服で出場して着替えの時間を無くせ

L

「それだけは許さないわよおー・・・・・・・」

「うわ！さわちやん”失恋モード”だ！！」

「失恋モード?」

「そ、うだよ、ゆーくん。失恋モードのさわちゃんはだれにも止められ

「着替えの荷物は、この袋の中に入っています。」

そう言つてゐるで『バオ・ハード』のジンベのような動きで

俺に近づいてくる山中先生。

非常に動きは気持ち悪いが、女性は女性。

あんま近づかれると・・・マズイ！！

「わ、分かりましたよーーでもどうするんすか！？たしか軽音部はトップバッターっすよー遅れたら全体進行に支障が出ちゃいますって！！」

「確かに結祐がいつ」とも正しいな

「でも澪、練習も着替えもどうにも出来ないんだぞ？」

田井中先輩のその言葉でこの場にいる全員が黙り込んだ。
ぶつちやけ最悪の状況だ。

「」の間にも刻一刻と時間は迫つてゐし、一体どうすりゃあ・・・
・
・

そう思つた時だつた。

「そうだ！！」

「なんか浮かんだのか唯！？」

「うん！？」

「なになに？教えて唯ちゃん！？」

「えつとね、一つ一つやつて間に合わないなら同時にやればいいんだよ！」

「同時に・・・？」

「そう！私たちが練習している間にアンプを、着替えている間に楽器を運んじゃえばいいんだよ！？」

「でも平沢先輩。生徒会は手伝ってくれないんすよ？」

「そうだぞ唯。たしかにそれなら可能だけど、誰がやるんだ？」

「そうね・・・。たしかに私たちは動けないから、自由に動けるのはさわちやんぐらいよね・・・」

「私！？無理よ無理無理！？そもそも着替えの時は私がいない

「違うよみんな。私たち軽音部にはもう一人部員がいるじゃん！！」

「…………」

その平沢先輩の言葉で、傍観者だったはずの俺は急に話の中心に放り出された。

つてか、この流れはまさか…………

「お、俺一人で…………！」

いやいやいや、絶対無理でしょ！！

一人でドラムもアンプも全部運べるわけ無いじゃん！！

そんな悲痛な思いを込め、俺は唯一田を見わせられる田井中先輩の目を見つめた。

すると田井中先輩はとたんに優しく微笑んで俺に言い放った。

「ユウ…………頼んだぞ…………」

こうして俺の高校生活初の肉体的死闘が幕を開けた。

ライブまで残り30分！！

第四話　？新歓ライブ！！ - 前編 - ？（後書き）

次回は
・
・
・
・
・

「あなたも大変ね・・・・・」

『目のやり場がねえええ！！』

『あの、入部希望なんんですけど』

次回【新歓ライブ -後編-】

第五話　？新歓ライブ！！ -後編- ？（前書き）

新歓ライブ後編です。

曲名や歌詞は、著作権保護法に触れるため虫食いや一部のみとなっています。

ご了承ください。

それでは、どうぞ。

第五話　？新歓ライブ！！－後編－？

「ぜえ・・・ぜえ・・・」

現在、俺、邑園結祐は自分との死闘を繰り広げていた。
しかも、一種類の。

一つは肉体的死闘。

要はアンプ運びなわけだが、山中先生から台車を貸してもらつても重たいものは重たい。

しかも階段は台車だと担がなくてはならないのだ。

アンプだけであともう一往復しなきゃなんねえのかよ・・・。

次にもう一つの死闘。

それは

「目のやり場がねええええつつ！－！」

精神的死闘。

つつても、普通ならこの状況でそんな戦いは起こらない。
はずだけど・・・・・にしろ俺は女子と目があつただけでショートするようなかわいそうなスキル（？）を持っているため、この女子で溢れかえった廊下を通るのは相当きついのだ。

しかも、俺は今台車でアンプを運搬中。
どの方向からも好機の目が絶えねえええつ！！

「へつ……耐えるんだ田園結祐……お前はできる男だツツ……」

やう叫びながら俺はひたすら講堂へと走った。

「こんにちわ。

平沢憂です。

今日は私が見る初めてのお姉ちゃんのライブです……！

「純ちゃん。一緒にライブ見に行かない？」

「ごめんね。憂。私ジャズ研に入部したから、そっちの手伝いが
つて……」

「あ、そつなんだ……」

「ごめんね

「つづくん。気にしないで！

「ホントにごめんね。それじゃあ、私行くね」

やう言つて純ちゃんが教室を出よつとした時でした。

『耐えろ俺えええ…………ツツ……』

と叫びながら凄い速度で何かが通り過ぎました。

よく姿は見えなかつたけどあれは……

「ねえ、憂」

「なあに？純ちゃん」

「今つて結祐だよね？」

「うん。 そうだと思つよ。 たしか結祐くん、 軽音部に入部したってお姉ちゃんが言つてたから」

「へえ・・・あの結祐がね・・・まあ、 いつか。 それじゃあ、 今度こそ私行くね！」

「うん！ ジャズ研頑張つてね！」

わう言いながら手を振つて私は純ちゃんを見送りました。

さてと、 じゃあ一人で見に行こうかな・・・と席を立つた時でした。

たまたま、 鞄を持ち上げてビニカへ行くとする女の子が見えました。

確か、 中野梓ちゃんだったかな・・・？

せつかくなので私は誘つてみるとこしました。

「あのひーーー！」

「あなたも大変ね・・・」

それが汗水たらしてアンプを運んできた俺を見た真鍋先輩の率直な感想だった。

「軽音部に入部して大変じゃない？ 唯から聞いたわよ。 すぐに気絶しちゃう面白い後輩が入部したって」

「まあ、 気絶しちゃうのに関しては何部だろ？ がこの学校に入った時点ですアウトだし、 それに、 僕が決めた道だから。 途中であきらめ

「んのはカッコ悪すすぎですしね」

「偉いのね」

「真鍋先輩には敵いませんよ。つか、平沢先輩から聞いたってことは俺がどんな条件でショートするかも存知で？」

「ええ。田を合わせたりすると駄目なんでしょう？だから今も下向いてるよね？」

「『理解と』協力感謝します！…それじゃあ、俺続きがあるんで『ええ。頑張ってね』

そう言つてくれた真鍋先輩に軽く手を振つて俺は部室へ向かった。

そして現在12・58。

結局俺はあの後、一一台のアンプ、ドラム、キーボード&ギター&ベースを運ぶために三往復もした。

一応俺は中学時代、陸上部だったのでもまあ体力はあると思つたのだが・・・・・

「やっぱり半年以上空くと体力もなくなるわな・・・・・」

「お疲れ様。後は唯たちを待つだけね」

「そ、そうですね・・・・・」

「大分疲れてるみたいね。とりあえず、水でも飲んだら？」

そう言つて真鍋先輩は俺にペットボトルを差し出した。

真鍋先輩、メツチャいい人だ！！

「ありがとうございます！…あ、でもこれまさか・・・・・」

「ああ、大丈夫よ」

真鍋先輩がそう言つので俺は有難く水を一口いただいた。
その瞬間、

「まだ私しか口付けて無いから」

・・・・・ポンッ！！

だから、それを懸念してたのに・・・・・。

大丈夫って言つたじやん！この裏切り者――――――！

そう言いたかったが、意識が朦朧としてうまくしゃべれない。

ただ、真鍋先輩は俺がショートしたことに気がつかず、喋り続け
ていた。

「邑園君が気にしてたのつて関節キスのことでしょ？私そういうの
気にならないから大丈夫よ。だから、遠慮せずに飲んでね」

そう言つて真鍋先輩はやつと俺の方を見た。

白い蒸気を存分に上げて氣を失いかけている俺を。

「・・・・・あれ？」

おそらくとても見慣れた光景とは言えないからだろ？
いつも落ち着いている真鍋先輩がそう腑抜た声を出した時、ちょ

うど軽音部が到着した。

そして困惑している真鍋先輩に向かつて秋山先輩が一言。

「和・・・・今度から気をつけような」

そしてついに迎えた13:00。

俺もなんとか1分で意識を回復させ、サントラ部は全員集合した。

チャイナドレスで。

「よおーしー！全員準備は良いなー！？」

た
大丈夫！」

卷之三

「どうなさいなんだ？」

「まあ、絶不調ではないつす」

—それでよし…！」

そう言って田井中先輩は俺に一ツと笑うと、ドラマステイツクを

頭の上にあげ叫んだ。

「よつしや——! 行くかあ——! 」

13:00.

お姉ちゃんのライブを見るために私は講堂に来ていました。

さつき誘つた中野梓ちゃんと一緒に。

「うーん。付属の壁紙がついてる

「ううん、大丈夫」

そう聞こえた様ちゃんは何だかつまんなそうでした。

何か、誘わないほうがよかつたかな？

そう私が思つた時。

ステージの幕が上かり始めました。

俺は先輩たちの演奏を舞台袖で聞いていた。

最初の曲は『ふふ時間』。

父語も同語もソリハシテ、今が曲で何が如みて、聞いが曲でもある。

}

と、平沢先輩の声が会場中に鳴り響く。

やつぱりあんまりつまらないな。

俺は苦笑いしていた。

でも、

『～～～～どうこーかーなーるよねつーー』

やつぱり引き込まれるな。

そんなことを再確認している間に、一曲目が終わってしまった。

確か、一曲目の中に部活紹介入れるつて言つてたな。

そう考へている間に、平沢先輩のMCが始まる。

・・・・あの先輩、若干抜けてるけど大丈夫か？

『え～。新入生のみなさ「キイーーーーンッ」あわわ・・・』

大丈夫じゃ無かつた！！

頼みますよ、平沢先輩！！

これで部員獲得できないと、1年生俺一人になっちゃうからつー！

『えつと、改めまして。新入生のみなさん。』入学おめでとうございます！そして、今日は私たちの曲を聞いてくれてありがとうございます』

そこまで言つたとこで俺はちょっと心配になつて、舞台袖から出て観客を見てみた。

怪訝な目で見てる人はいないっぽいから、まあ大丈夫か。つつか、むしろチャイナドレス効果で好機の目で見てる人が多いな。

『私たち軽音部は現在5人で活動しています。せつかくなので部員も紹介しておこうと思います』

案外平沢先輩はMCいつまいんだな。
聞いてて安心する。

そう感心しながら、俺は再び舞台袖に戻る。

『まずは、ベースの秋山澪ちゃんです。澪ちゃん一言どうぞ』
『え、えっと。秋山・・・・・澪・・・・です』

“かわいいーーーっ！！”という歓声がまばらに起こった。
だてにファンクラブがあるわけじゃなつてことか。

『次に、キーボードの琴吹紬ちゃんです』

～『琴吹紬です 今やつたようにキーボードをやつします』

『ありがとムギちゃん。それじゃあ次は、我らが軽音部の部長にしてドラムの』

『田井中律だーーー』ダダダンッ！

田井中先輩が叩いたドラムに合わせて、”カッコいー”という歓声が巻き起しつた。

田井中先輩ナイスッ！！

さて、それじゃあ後は平沢先輩が紹介して一曲目、三曲目突入か。なんとか行けそうだな。

俺が安堵の息をついた時だった。

『ありがとね～りつちゃん。えつと次は、みんなと同じ一年生です』

という、謎のMCが始まったのは。

明らかにおかしいよね？

俺演奏すらしてないのに、つか入部したの昨日なの、なによりこれって一年生のためのライブなのに、何故ここで俺を出す！？

そんな俺の気も知らず平沢先輩はMJCを続ける。

『今はまだ何の楽器もやつて無いけど、今日ここに楽器を運んでくれたのはその一年生です』

待て待て待て…！

この流れは舞台に出なきゃいけないパターンじゃねえか！

無理だからね！俺がこのタイミングで出るのもおかしいし、まず第一俺は舞台なんかに出たら突き刺さるような視線に負けてショートだつづーの…！

そう嘆きながら頭を抱えた瞬間。

隣の真鍋先輩が、俺に向かってこう言つた。

「観念したほうがいいわね」

「仰るとおりです…うう…」

『それでは出てきてもう一回園結祐くんです…』

…覚悟は決まった。

俺、出陣…！

と、意気込んで俺は舞台上がつた。

『それじゃあ、ゆーくん一回だつた』

「・・・・・」

『あれ？ ゆーくん？』

「・・・・・」

『・・・・ まさか！ 唯一のあえず続ければもう黙だまーー』

『え？ わ、分かった！ えへと、ゆーくんはあの・・・ その・・・・・』

□

ざわつく新入生を必死に平沢先輩がなだめるのと同時に、俺の残された意識は消え去った。

「ほんとにすいませんーー！」

「いや、そんなに謝んなよ・・・」

「でも、俺がショートしたせいでライブを台無しにしつつて・・・」

「いや、あれは私たちの不注意もあるから、祐が気にする」と無

いよ

「いや・・・ ほんとにすいません」

もう謝るしかなかった。

何故なら、俺がショートしたせいで雰囲気は台無し。

加えて、時間が押してしまって一曲しか演奏できなかつたんだか

ら。

謝つても、謝りきれねえよ・・・・・。

これで新入部員来なかつたらどうしよう・・・・・。

「どうあえずお茶にしましょうか

」

「やつだなークヨクヨクしてもしょうがないしなー。」

やつ先輩たちは俺を元気づけようとしてくれているが、入部一日でこの失態。

簡単には立ち直れねえよ・・・。

とはいえ、折角の好意を無視るわけにもいかないのでとつあえず席に着く。

「・・・やっぱ入部希望者来ないっすね。はあ・・・」

「まあ、新歓ライブがあんなことになつちやつたしな

「律ー！」

「う、嘘だよ・・・」

「いやこや、田井中先輩の言つ通

」

コンコンッ。

それはドアをたたいた小さな音だったが、一瞬で俺たちの口を黙らせた。

入部希望者かも。

そんな期待が俺たちの中で渦巻く。

が、いつまでもドキドキしてほっとくわけにもいかないので、田井中先輩がドアに向かって言つた。

「どうぞー」

すると、ドアがゆっくりと開いて、

「あの、入部希望なんですけど・・・」

「い、今なんと？」
「入部希望です」

その言葉を聞き先輩たちの表情が一気に明るくなる。
もちろん俺も、気絶後特有の酔つた時のよつなグラグラする視界
でドアを見て、表情を明るくした。

う～ん、でもあのシルエットどつかでみたような？

そう俺がぐらつく視界で出入口を見続けると、田井中先輩
がたちあがつた。

そして、

「確保―――――っ――！」
「きやああああああ――！」

と、叫びをあげる入部希望者に無理やり抱きついた。

おーおー、んなことしたら逃げひきつんじゃ・・・

そう俺が懸念を抱いたその瞬間。

俺のぐらつく視界がきつちり新入部員の顔を捉えた。

特にこれといって琴吹先輩のような特徴は無かつたが、長い紺の
ツインテールが特徴的な女子・・・・・・・・つてあいつは――

「梓あ――？」

その俺の叫びに反応して新入部員が俺の方を向く。

田がぱつぱついたけど、ショートしない。
やっぱり梓だ。

と、確信は一応得たが念のため確認しておこう。

「お前、中野梓だよな？お前、なんでこの学校にいるんだよ？」
「それはこっちの台詞！！結祐こそなんでこの学校にいるのー？」
「元女子高だよー？」
「そ、それは色々あつたんだけど、とにかく良かつた！！入部してくれたことも、梓がこの学校にしてくれたこともーー！」
「・・・えっと、お一人さん。盛り上がりつてるとこ悪いんだけど。
知り合いなの？」

田井中先輩のその質問に対しても、俺と梓は田を見合せた。

別に隠すことじやねえよな？

そうお互に確認すると、ありのままを言った。

「俺（私）たち、幼馴染です」

第五話　？新歓ライブ！！ -後編- ？（後書き）

次回は・・・

『放課後が楽しみでした！！』

『”ツンデレ妹属性の中野梓ちゃんだろ！？』

次回、【新入部員？】

第六話　？新入部員？？？（前書き）

第六話です。

相変わらず、いや、いつも以上の駄文ですいません（――）

それでは、どうぞ。

第六話　？新入部員？？？

これはいつもの登校中。

俺はこの春、隣の市から引っ越してきて「近所さんになつた悪友、篠原勇利と歩いていた。

「なあ 勇利」

「ん？ どうしたんだよ 結祐？ 俺の顔をじっと見つめちゃつて」

「・・・・・」

「な、何なんだよ！？ 僕の顔なんかついてる？」

「・・・・いや別に」

「じゃ あなたさ？ はつ！ もしかしてカツコよすぎの まめの顔に惚れただ？」

「んなわけあるかアホたれ」

「じゃあなんなんだよ？ そんなに顔を見つめられるとウチ照れちゃうんだけど」

そう言つて 勇利は顔を両手で覆つて左右に振つた。

ぶつちやけ 気持ち悪い。

つと、俺が言いたかったのはそんな事じや無かつた。

「あのさあ、アホみてえに舞い上がりてる所悪いだけじゃん？」

「ん？ 何？」

「お前のその一人称を変える癖、治んねえの？」

「・・・あれ？ また変わつてた？」

「ああ。ばっかり変わつてたぞ」

「マジかよ。これでも小生気にしたつもりだつたんだけどな」

「お前の一人称の守備範囲は広すぎだろ・・・・・」

俺はいつも呆れながらずれ落ちたスクールバッグを抱きなおす。

その隣では勇利が”うへん・・・何で変わったやつんだろうな～”と呟きながら歩いている。

そんな俺たちはそれぞれちよつとした癖で中学時代に「呼ばれていた。

『残念イケメン』と。

？？？？？

時と場所が変わって、ここは俺の教室。

まだ朝早いので、今は勇利と俺しかいない（と言つても勇利はクラスが違う）。

まあ、いつも一番乗りなんだけだ。

「そんなこともあつたなあ～。『残念イケメン』なんて言われたことが」

「俺も勇利も変な能力つづーか、変な癖つづーか、まあ残念と言われて思い当たる節はあるよな」

「だな！俺は一人称がおかしくなるし、結祐は女嫌いだもんな」

「別に女嫌いではねーけどな」

「お？じやあ結祐も彼女とかほしかつたりすんの？　ｗｗ」

「・・・思つちゃ悪いか」

「べつに～じやあなおそれ治さないとね～」

「お前もな」

そう言つて俺たちは顔を見合させた。

「つか、俺も勇利もイケメンなのか・・・？」

勇利を見ても鏡を見てもそれは思わねえんだけど・・・。

と軽く首をかしげると、どうやら勇利も同じことを考へていたらしく、

「やっぱ結祐イケメンって程じゃないな。俺もだけど」「だよな！そもそもイケメンの『イ』の字もねえもんな」「うん。だよな～。なのに残念とか言われちまつて。あんまりだよなあ～」

「まあ、それも中学時代の話だけどな」

「だな！今となつちや俺はただの変人。結祐はただの変態だもんな！」

「勇利、お前には死んでも言われたくねえよ・・・」

そう、なつかしく悲しい『残念』時代を思い出し俺たちが笑いあつていた時、教室のドアががらつと開いた。

「あ、結祐。おはよう。つていうか、クラス一緒にだつたんだね」「ああ、梓か。どうやらそうみてえだな。俺もビックリだわ。つかどうした？早いな」

「うん！今日は初めての軽音部だから早く学校に行きたくて！」

「あ、そつか。今日から練習だもんな。梓はギターか？」

「うん。小学生のころからやつてるしね」

そう言いながら、俺の右斜め前の席に梓は座つた。

席近つ！――。

多分、初日の血口紹介とか田中はほとんびん絶して保健室だったから分かんなかつたんだな、お互いに。

そう思つてこると、梓が自分の席に荷物を置いてこひきよつてきた。

「結祐はなにをやるの?」

「まだ決まつてねえよ。とりあえず俺音楽知識のだし、先輩たちに聞いてから決めようと思つてな」

「そつか。それにしても、結祐が昨日舞台上に上がつた時はビックリしたよ。最近会わないのでとは思つてたけど、まさか同じ学校のなんじクラスとは思わなかつたし」

「それは俺も

「

「ちよつと待つたあ……」

今まで呆けていた勇利の横やりの一撃によつて俺の言葉は遮られた。

つか、声でか！

梓までビクッちやてんじやん。

「結祐君。これはどうこいつことだい？」

「どうもこいつも何が？」

「だ・か・り。こいつからお前はこんな可愛い女子と喋れるよつたんだよーーするいぞオイラを置いて！」

「ああ……そうこいつことな。そうこいやお前は梓のこと知らないもんな」

「いや。名前と顔は知つてゐるぞー小柄な体と若干シンシンしていそうな雰囲気で”シンデレ妹属性”の異名を持つ中野梓ちゃんだろー？一部の男子に人気なんだぞー！」

「へつー？そ、そんな・・・・・

「おいおい、なにを言つてんだお前は。梓照れつかつてんじやんか」「照れる姿も可愛いなあ・・・・・。つてそんな事は今はいい！！問題はなぜそんなに可愛い梓ちゃんと貴様のようなヘタレクズ野郎がつるんでんだつてことだ！…」

勇利はそこまで一度もかまづに言つさると、”うわああああああ”と言いながら頭をかきむしり始めた。

梓は梓でまだ照れっぱなしだし。

なんなんだこの光景・・・・。

でもまあ、勇利がやつ言つのも仕方ないよな。

確かに梓と俺は幼馴染だけど、梓は市立の中学校。俺と勇利は私立の中学校だったから、直接的に勇利と梓の接点は無かつたしな。

そりや、勇利から見れば俺が梓と喋つたりしてんのは不思議に感じるわけだ。

ましてや、幼馴染だから梓じゃショートしねえしな。
なおさら不思議だつたんだろうな。

そう考察したところで、とりあえず俺は悶えている勇利を鎮めることにした。

「えーとなあ、勇利

「なんだよつ！裏切り者！！」

「いや、俺は別にお前を裏切つたりなんかしてねえよ。俺と梓はただの幼馴染だから」

「へ？」

「だから幼馴染。生まれた病院も幼稚園も小学校も一緒に、家も道を挟んで隣なんだよ。な？梓」

「え！？あ、うん。そう。そうだよ！」

「じゃ、じゃあ、お前は俺を置いて行つたわけでも、梓ちゃんをGETしたわけでもないと？」

「もちろん」

「よかつたあー！吾輩てつきり梓ちゃんと結祐はそういう関係かと・・・」

「アホだなあ。勇利」

「ああ！俺がアホだつたー！結祐ー！やっぱりお前は最高の友達だ！」

！」

そう言いながら、勇利が俺に抱きつこうとしてきたため、俺はそれを足で蹴り飛ばして防ぐ。

そんな状況をちょっと引き気味で見つつ梓が俺に尋ねてきた。

「あのさ結祐。その人は？」

「ああ、こいつは篠原勇利。見ての通り変な奴だけど根っこはいいやつだから。仲良くしてやつてくれ」

そう言つて俺は勇利を梓の前に突き出した。

梓はちょっとうるしたえていたが、俺の目を少し見るとおずおずと自己紹介を始めた。

「なかの
中野 梓です。えーと・・・」

「篠原勇利ですー！勇利って呼んでくださいー！」

「えーと・・・、じゃあ、私も梓でいいよ」

「マジでー！やつたー！それじゃあ、よろしくね梓ちゃんーー！」

「うん。 よりしへ勇利。 ところで、 それが嘘つてた事なんだけど・・・
・・・ホント?」

「ほんとだよ! 梓ちゃんホントに一部の男子に人気あるからーーー。」

それを聞いて梓は再び照れ始めた。

ま、 でも勇利のその情報は嘘じやないだろ? から俺が何か言う必要もないだろ。

にしても、 勇利もよく堂々と言えたもんだな。

そもそもこの学年男子が25人しかいないから、 一部んて言つたら精々1~2人だろ?

それに気がつけば、 あんなの勇利が梓のこと好きだつて言つてるようなもんじやねえか。

まあ、 気がつかれないよ! と云つたりと云つのは勇利の得意分野だしな。

つつか、 何人にあんなこと言つてんだ? つ・・・・・?

と、 俺がうれしそうにしている勇利と若干引き気味の梓を見て苦笑していると急に先生の声が飛んできた。

「お前ら、 何やってんだ! ? 今日は朝会だから登校したら荷物持つたまま講堂に集合だぞ! !」

「あ、 そういう、 この学校つて朝会の時教室に荷物置かずに直で行くんだっけ?」

「つべこべ言わんで早く行け! !」

「「「は、 はいっつーーー」」

そう3人そろって叫びながら俺たちは講堂へ向かった。

？？？？？

時と場所が再び変わって放課後。

勇利はあの後休み時間になるたびに俺のクラスに来て梓や憂と話していた。

ま、仲良くなつたらそれまでよ。

「んじゃ、行くか」

「うん。早く行こーー！」

梓はそう言つて、まるで子供のよひよひしゃがながり音楽室へ走つて行つてしまつた。

と、思つたら、

「結祐、はやくーー！」

階段とじで待つていたのか。

つたぐ、しゃーねーなあ。

「今行くつて」

「楽しみだな～軽音部。どんな練習するんだり?」

「そうだな～。例えば、お茶を

「言わないで結祐ーー私の目で確かめたいーー」

「・・・・・気合入つてんな～」

「だつてあんなに感動する演奏できるんだもんーーあつと凄い特訓とかしてるんだよ」

「前半だけ同意しここでやるよ」

そう他愛のない会話をしているうち部室の前に立ついた。のだが、梓は緊張しているらしくドアを前にして止まってしまった。

・・・・・マジで子供かよ。

そう思いつつ、俺はドアを開けた。
その瞬間、

「ひんにちわーー！」

梓が部室に飛び込んだ。

ドアが開いたら俺は用済みかよ。

「こんにわーっす

「おお！一人とも来たか！」

そう言つたのはおでこが特徴的なドラマ担当の田井中先輩。
ボーカルシチュな先輩で、身内と梓以外で唯一俺がショートしない人物だ。

他にも憂の姉の平沢先輩、まゆげ（剛毛ではない）が凄い琴吹先輩が既に来ていて。

ちなみに田井中先輩だけしつかり説明したのは、田井中先輩のみ直視することができるからだ。

ふ・・・何たる悲しい事実。

「お、おこごう。なんか哀愁漂つてるけどだこじみつぶか？」

「え？ 大丈夫ですよ」

以後ナーバスにならないよつ氣をつけよ。

「それにしても、梓は元氣いっぺいだな」

「はい！ 放課後が楽しみでした！！」

「そつか～。それじゃあとりあえず

「練習ですか！？」

「お茶にするか」

「え・・・？」

そう呴いた梓はホントに拍子抜けした顔をしていた。

しかし、梓は新入部員。

先輩に無理に逆らうことよりもよろしくないので、おとなしく席に着いた。

もちろん俺もだ。

そのあとはもう梓が何か言ひ隙は無かつた。

「はい、梓ちゃんも、結祐くんもどうぞ～」

「あざつす

「ありがと～」それこそああ

とお茶が配られ、

「お菓子もどうぞ～」

とケーキが置かれ、

「わーい ケーキ」

「うまそー」

「ありがとなムギ」

「いいのよー」

といつの間にか合流した秋山先輩を含む先輩が全員食べ始めてしまったからだ。

「あの、これって・・・」

「ああ、梓も食べろよ。おいしぃぞ〜」

「いや、だからその・・・」

「なんか不満なのか？梓。先輩たちに言えれば多分コーヒーも紅茶もミルクティーも出てくるわ」

「いや、結祐。やつじやなくて。音楽室をこんな事に使つていいのかなつて・・・」

梓はそう言いながら下を向いた。

・・・・・これはヤバいかもな。

今までの経験で俺はそう思つた。

何故なら、梓は真面目すぎるからだ。

それゆえ、このような気が抜けた状況に長く居座ると我を忘れて暴走することがしばしばある。

最初から懸念はしてたが、思つた以上に気をつけないとな・・・。

そう俺が心の中で決意した時、

ガチャ・・・

と、山中先生が入つてきた。

それを見て梓が急に強張る。
きっと、音楽室でお茶していることを怒られるとでも思ったのだ
らう。

「あ、あの先生これは・・・・・！」

「あ、私ミルクティーね」

「あれ？先生・・？」

再び梓が拍子抜けした表情になる。
これはヤバい、やばすぎる・・・・・！

「あ、新入部員よね？」

「あ、はい。中野梓です」

「私は顧問の山中さわ子です。よろしくね」

「顧問だったんですね！」

思わず横槍を入れてしまった。

だつて、顧問なんて昨日は一言も言つてなかつたし。

「あら、結祐くん知らなかつた？」

「初耳つすよ。俺、てつきりただの変態音楽教師としか『おいコラ

！』・・・嘘つす

「それにも新入部員か？春ねえ～

「新しい彼氏できたかさわちやん？」

「余計なお世話よ～ほつといて！～」

「『めん』めん。悪かつたつて～」

「そういうつちゅうちゅうなんじゅうなのよ？」

「私はそういうのは…………」

・・・・・ヤバいやばいやばいやばい！！

俺もついついこのムードに乗っちゃったけど、これはまずい。
梓が、暴走しちゃう…………！

そうお思いつつ、ちらりと梓を見てみるとなんだか難しい顔をしていた。

どうした？

そういう声をかけよとした瞬間、梓は急にすくっと立ち上がった。
そして迷わずギターを肩にかけ、

ジャーン

「つるわあーーーーーー！」

怒鳴が飛んだ。

・・・これは予想外だ。

梓が暴走せずにギター弾き始めたのもそうだし、山中先生が怒ったのに關してはもう意味不明だ。

と、とりあえず、梓だ。

泣きだしたらかなわねえ…………！

そう思い俺は梓に駆け寄りつつと思つたのだが、既に秋山先輩がフ

オローに回つていた。

じゃあ、先生の方をと今度は先生の方をみたのだが、先生は先生

で田井中先輩に怒られていた。

やっぱ大事な後輩のこととなれば怒るよな。
ま、なにはともあれ先輩たちのおかげでなんなく収束できそうだ。

そう安堵の息をついた瞬間だった。

「こんなじや駄目ですーーーっ！！」

ああ、はじまっちゃった・・・。

「あ、梓がキレた！？」

「コウ幼馴染だろ！？どつにかしらーーー！」

「うなつたら止めようがないつす」

「そんな！？」

そう絶望している田井中先輩をよそに梓の暴走は加速する。

「皆さんやる気が感じられません！？」

「「「「「うつ・・・・・」」」

「ま、まあ梓。先輩たちも昨日新歓ライブだったんだし・・・」
「関係ありません！！それに音楽室を私物化するのもダメです！？」
「イーセットは撤去すべきです！？」

「て、撤去・・・・

「それだけは勘弁を・・・・・」

「何で先生がそんなこと言つんですか！？」

「ま、まあ、落ち着けって」

「これが落ち着いてられますか！？」

あ・・・。

もつ俺の手には終えねえ。

・・・あと10分は続くかな。

俺がそう思つたその時、

「落ち着いて～」

と、平沢先輩が梓を後ろから優しく抱きしめた。

「「「いや、そんなんで収まるわけ」」」

そう言つかけた時、

「はうわ～」

「「「落ち着いてる！？」」」

?????

「さつきはすいませんでした！」

まさかのハグで正氣に戻つた梓の第一声はそれだった。

対して、田井中&平沢両先輩の第一声は、

「大丈夫だよ、気にしてないから」

「いや、気にしてよ～・・・・」

「そうだな。梓の言つ」とも一理あるしな」

そう秋山先輩が味方についてくれた。
が、梓は相変わらず下を向きっぱなし。

そうといつ後悔してんだろうな。

とにかく今後は「こういうことがない様にしねえ」と。

そう決意し、生意氣と言われるのを覚悟で練習しました。つもりだったのだが、秋山先輩が代わりに言つてくれた。

「これからはもっとやる氣だして出していいかなとな。わかりましたね！？」

「「「はあーい」」」

しかし、梓の軽音部「トビュー」は最悪の状態で始まった。

第六話 ? 新入部員 ? ? ? (後書き)

次回は
・
・
・
・

「はあ～・・・・。行きたくないな～」

次回【新人部員?】

第七話　？新入部員？？？（前書き）

新入部員？です。

読んだら感想くれるとうれしいです。

それではどうぞ！

第七話　？新入部員？？？

またまたこれはいつもの登校風景。
ただし、メンバーは増えたけど。

「はあ～・・・。今日は部活きたくないなあ・・・」

「そんなに落ち込んでどうたの？梓ちゃん？」

「ちょっとね・・・。あ、『梓ちゃん』って呼ばれると変な感じが
するから、『梓』にしてもらっていい？」

「え？まあ・・・。意識してみるよ。それより本当に大丈夫？僕
でよければ相談に乗るよ？」

「あ～そのへんにしどけ勇利。誰だって話したくねえ事はあるだろ
「まあ、それもそつだね。じゃあ、なんかあつたら小生に相談して
ね」

「小生・・・なにそれ？」

「そんな梓に結祐くんの分かりやすい解説）。『小生』とは古文な
どで使われる一人称のひとつです！！」

「勇利は古文にはまつてるの？」

「吾輩？はまつてるわけ無いじゃんか～」

「今度は吾輩・・・！？」

「再び結祐くんの解説）。勇利は一人称を無意識に変えてしまうと
いう摩訶不思議な癖を持っています。ちなみにそのバリエーション
は今まで確認したもので6種類！！・・・ぐらいだつたきがす
る」

「へ、へえ～。なんか面白い癖だね」

「そんなことないよ～。これのせいで気持ち悪がられたり残念とか
言われたり・・・。拙者はいつも気をつけているのになあ～」

「「拙者！？」」

「いやしかし、他愛のない会話から俺たちの一日はスタートする。

？？？？？

「終わった――――」

「HR終了」のチャイムとともに俺はそのまま戻りでいた。
先生の机の前で。

いや、正確には、俺が身体を起して机の前に先生がいたってほうが正しいかな。

・・・・・・・・

ベテラン教師特有の冷たい目線が痛い。
くそつー。うなりや、何か言つしかない！――

「先生、また今日は一段と老けてますね」

「はあ・・・・・。全く誰のせいだと想つとるんだ・・・・・。まつこー。

号礼は無しだ、これでHRを終わる

そう言つて、先生は深いため息をつきながら教室を出て行つた。
ありやあまた老けるな。

「それにしても、勉強つてめんどくせえなー」

「しようがなによ。それより結祐くん！ 今日は一回も氣絶しなかつたね！――

「確かにそうだな。つつても、ほとんどの授業寝てたんだけどな」「それはよくないと思うけど・・・・。でも結祐くんちょっとずつ治つてきてるみたいだね。軽音部の影響？？」

「ああ・・・・。それが大きいな。特に憂、お前の姉ちゃんは無自覚に田を呑わそうとしたり、面白がつて手を繋いこうとしたりしてくる

もんだからたまんねえよ

「それは確かにたまらんなー。」

「「勇利（くん）ー？」」

ほんとにコイツは神出鬼没だな。
でもまあ、楽しいやつだからいいけど

「いいなあ結祐は

「何がだよ？」

「軽音部だよ軽音部！お前以外全員女子だろ？たまらんだろ！！」「確かに、私も学校で放課後までお姉ちゃんと一緒にいれるなんて思つと・・・・いいなあ」

「お、憂ちゃん！話しが合うねーー！」

「そうだね！ そりいえば何で勇利くんは部活に入らないの？」
「確かに。憂は家の家事があるって理由があるけど、暇人勇利には無いもんな」

そう俺が若干皮肉をこめて言つと。

話しに入るタイミングをうかがつていた梓が口をはさんだ。

「勇利はちょっと変な子だからどの部にも入れなかつたんじゃないの？」

「ひどいよ梓！俺そんなに変な奴じやないよーー！」

「「ビーだかなー？」」

「結祐まで・・・！ヒドイよーーよつてたかつて某をいじめて・
・何が楽しいんだー？」

「お、某だつて。新種の一人称だ」

「人の話を聞いてよ・・・・・」

そう呟くと、勇利は俺の席に突っ伏してしまった。
だが、梓と俺は大体勇利といつ人物像を分かつてるので拗ねても特に相手にしない。

そんな俺たちの代わりに憂が勇利を元気づけていた。

いや、元気づける前に、憂が声掛けた時点で”憂ちゃんありがと～！！”と復活していた。

本当に根っからの女好きだなコイツ。
ほんとに彼女作る気あんのかよ・・・？
そう俺が呆れたようにため息をついたとき、同時に隣で梓もため息をついていた。

まあ大体予想はつくけど。

「昨日のことが？」
「うん・・・。昨日迷惑かけちゃったから、あんまり行きたくないな
あって・・・」

そう言つて梓は、うつむいてしまつた。

真面目すぎなんだよな昔から。
だから、考えすぎちゃうんだろう。
ま、やつこいつときは俺が背中を押してやらねえと。

俺はそう思つとスクールバックを肩にかけ、梓の手をつかんだ。
突然のことに梓は若干戸惑つていたが、俺は気にせず梓の手を引
つ張つた。

「何やつてんだ。行」
「うぜ」

「でも・・・」

「でもじやねえ。どの道行かなきや始まんねえだろ?」

「そつだね。でも先輩方怒つてないかな?」

「なあに、俺がついてる。そんとれやな」とかしてやるよー。」

「・・・・ありがと結祐」

そう梓が呟いたのを聞き、俺はもう一度梓の手を引ひ張つた。
今度は抵抗なく梓もついてきてくれた。

さあて、先輩たちの「ことだから怒つてはないだらうナビ・・・・・
さすがに今日も練習せずにお茶なんていことせないよな?」

さう一抹の不安を覚えながら俺と梓は部屋へ向かった。

そのとき、勇利の殺すような視線が俺の背中を貫いていた気がし
たけど、まあ氣のせいだよな。
・・・・・そつ信じていいとした。

?????

「いんちわー」

「いんにちわーって」

「（全然懲りてない!）」

思わず、梓と全く同じリアクションをとつてしまつた。

でも、またお茶してんだもん。

昨日あんだけの「とあつたのに・・・・・。

「先輩、練習はどうしたんすか?」

驚かすやうだろ。

ま、でもこれで練習に繋がるなら良しか。

「今からやないと遅いってんだぜーーー。」「

「...נִזְמָנָה」

「あの、やる気があるのは結構ですけど、見苦しいっすよ」

「な、何かかな？」

田井中先輩のその掛け声で”おー！”と言いながら平沢先輩がギターを持った。

七
九
七

「ケーキがないとやる気が出ない」

1秒持たなかつた。

まつたく、ホントに大丈夫かよこの軽音部。

「誰ちゃん。ケーキよ。せこ、あーん
あつがヒルサちゃん。・・・せむつ」

}

「す、凄い演奏だ！」

「凄い

そう俺たちが感嘆したのもつかの間で、その5秒後には、

「もつだめえー

へばつた。

集中力無さ過ぎだろ。

そう俺が頭を抱えていると、同じく隣で頭を抱えている梓に平沢先輩がよってきた。

それを確認した瞬間、俺は反射的に平沢先輩から離れていた。
我ながら素晴らしい反射神経だ。・・・・・多分。

そう自画自賛（？）している間に、平沢先輩がケーキを梓に食べさせようとしていた。

「梓ちゃん、あ～ん
「え？ でも・・・・・
「いいから、いいから～」
「う・・・・・で、でも・・・・・
「はい、あ～ん
「・・・・・はむつ！ はうわ～・・・・・
はい、梓陥落。

いともたやすく落ちたな～。
ま、それはそれでいいか。

そう思いながら、俺はお茶用の席からちよつと離れた椅子に座つた。
すると、

「はい。結祐くんも、あーん」

と、琴吹先輩が突如ケーキを持って俺の目の前に出現した。

・・・・・はい、俺陥落。

「あれ、結祐くんいらぬの？」

「あえーと……意識が危険なんてほんといてもらひてもいいですか？」

そう言つて琴吹先輩はおれの前から立ち去つた。

・・・・あの人絶対俺で楽しんでやがる。

今後は琴吹＆平沢両先輩には気をつけようと決意したその時、梓も平沢先輩に遊ばれていた。

具体的にどのよつにかと言えば、

?ケヰキ
梓

梓一はああああつ！！

梓 ケイ
ツキン

梓「ぱああああつ！？」

梓 ケイキ 梓

の繰り返しだつた。

ただ、ケーキの位置によつて変わる梓の表情を見てこの場にいた全員は同じことを思った。

（梓つてわかりやすくて、おもしろい）」「

?

「はー。やめなさい」

私は山中さわ子。

軽音部の顧問です。

さて、いつもなりのまま部屋に置いてお茶なんだけど、

「ティーセットは撤去だもんな・・・。よおーしーちゅうとは教師らしきやうだねーー..」

そう決意して私は部室に向かいました。
なのに・・・・

?

「みんな~、練習やつしゅ~、うて食べてんじやん~!」

それが部室にきた山中先生の第一声だった。
ま、でもしょうがないな。

昨日はあんだけ”撤去だ―――”って言つてたしな。

そう俺は思いながら、琴吹先輩がくれた紅茶を一口飲んだ。

それと、ほぼ同時に山中先生が超高速で席につきケーキを食べた。

「・・・私、今死んでもいい

「「おーい。戻つて」」

「あ、そういう。そういうば向でティーセット撤去しなかったの？」

「「切り替え早つ！」」

そう一回田のハモリを難なくこなした俺と田井中先輩を無視つて山中先生の視線は梓を捉えていた。

さあ、なんて答えるんだ梓？

『ケーキにつられました』か？

「な、なんでもかんでも否定するのはよくないと想つて・・・」

そう言つた梓を先生以外がジト目で見つめた。

が、当の梓はやり過ごせたと安心してそれに気が付いていない。

・・・つまんねえな。

そう俺が思つた時、急に先生が手を叩いた。

「そりや。私、梓ちゃんにプレゼントがあるのよー」

そう言つて先生は「わー」と何かを探しだした。

そして、出てきたのは、

「せ、先生。それは・・・？」

「ん？ ネコ耳よ」

「それは分かりましたけど、これをどういふと……？」

そう梓が言った瞬間、先生がものすごいスピードで梓の後ろに回り、肩をガシッと掴んだ。

数秒遅れて梓はそれに気が付き急いでその手を振り払った。

「な、なにするんですか！？」

「何って、ネコ耳つけるだけよ？」

「そんなの嫌です！ 先輩たちも嫌ですよね！？」

「ムギちゃん似あう～」

「さすがムギだな！」

「ありがとね」

「（つけてるつ…？）」

「さあ、みんなもつけてるじゃない！ 観念しなや！」

「そんな…。結祐！！」

「ゆーくん狼みたいだね～」

「ワオーッってやつてみろよ、ワオーッって」

「ワオーッ！？」

「わあ、似てる」

「（結祐まで…）」

「さ、次は梓の番だ」

「うう…。ホントにつけなきやダメ？」

「ガキの頃はよくつけてたじゃんか」

「それは幼稚園の頃！」

「まあ、いいからつけてみるって」

「うう……」

もう言こながら梓はネコ耳を装着した。

「変じやない？」

「別に。可愛いと思つぞ俺は」

「んじや、ニヤーツてやつてみろよー」
「いや、いやー……」

「……（か、可愛い）……」「……」「

どうやら梓のネコ耳はなかなか強い作用を秘めてるらしいな。
俺以外の見ていた人間が天に召されてしまった。

が、先輩たちはすぐに天から帰つてきた。
そして

「梓ちゃんかわい」「

と、平沢先輩が梓に抱きついた。

全くこの人は……。

「今日からあだ名はあず「やん」に決定だね！」

「え・・・・?」

「うーん。可愛い~」

そう言いながら、平沢先輩は困惑する梓に頬ずりし始めた。
そして、それを俺を含む軽音部は全員ほほ笑んでみていた。

しかし、今日も練習時間が削られていったのだった。

第七話　？新入部員？？？（後書き）

次回は・・・

『ひ、ひげ！！』

『つて言うか慣れたくない・・・』

『俺はそれでも、あのメンバーが好きなんだよ。きっと』

次回【新入部員？】

第八話　？新入部員？？？（前書き）

新入部員？です！

やつと、シリアルス展開若干突入です！

また、結祐の特技が出てくるかも・・・。

読んだ後は感想をくれるとうれしいです。

また、その際には悪いところも書いてくれるとそれを見てよりよくしていくのでよろしくお願ひします。（ただし、作者を誹謗中傷するものはこの作品に関わらず全ての作品でやめてください）

では、どうぞ！！

第八話　？新人部員？？？

またまたまたこれはいつもの登校風景。
ただいつものと違うのは、

「勇利めずらしいよな。朝寝坊なんて」
「そうだね。・・・なんか勇利がいないとちょっと寂しいよね」
「だな。なんだかんだであいつはムードメーカーだったしな」
「・・・そういうえば結祐つてどこやるか決めたの？」
「うん・・・まだ。でもヴォーカルやろうかなって」
「結祐歌うの！？」
「楽器できないし、俺の特技考えたらそれが現実的だろ？」
「まあ、確かにそうだね。っていうか、今日練習するのかな・・・？」

「だ、大丈夫！先輩たちだつてそろそろやるつて！」
「ホントに？」
「あ、ああ。俺がなんとかする！だから梓は安心しろ！」
「うん。分かった」

そう言つた梓の顔は、何だか納得しきれていない顔だった。

勇利と知り合つて3回目の春。
俺は初めてあの勇利の偉大さを知つた。

？？？？？

授業を適当に流し放課後。

今日は純の策略により数回ショートしたが、もう誰にも相手にされなかつた。

憂曰く『だんだんみんな慣れてきちゃつたんだよ。でもそれって結祐くんのことをみんなが理解できただつてことだよね』『だそうだ。

それにしても、放置はひどい氣がする・・・。

ちなみに勇利は結局学校を欠席したそうだ。

朝は『寝坊したから先に行つてくれ』としか言ってなかつたのに、風邪かな？

そう、一応悪友のことを心配しつつ、俺は部室への階段を息を切らして駆け上がつていた。

一応説明しておくと、別に物凄く軽音部に行くのが楽しみなのでない。

まあ、全く楽しみにしていないと言えば嘘になる。
けど、急いでいることには別の理由があつた。
まあとにかく部室で先輩たちに会わないと話しひにならねえ。

俺はそつ思いながら部室のドアを思いつきり開いた。

「い、こんちわー・・・。ぜえ・・・はあ・・・」
「あ、ゆーくん つて大丈夫！？」
「だ、大丈夫っす。それより、先輩たち全員いますか？」
「いるけど、どうしたの？」
「大事な話があるんすよ。この部のことで」

そういうながら、俺はお茶用テーブルの俺の席と思われる場所に

すすんで座った。

先輩たちは、俺が息を切らして入ってきたことにも驚いていたが、すすんで座ったことにはもっと驚いていた。

しかし、俺がいつもよりちょっとピリピリしているのを感じ取ったのか、全員何も言わずに座ってくれた。

「んで、コウ。大事な話ってなんだよ？」

「時間が無いんで単刀直入に言います。いい加減に練習しないことマズイです」

「そんなこと言つたつて。新歓終わつたばっかじゃんか～」

「確かに先輩たちにとつてはひと段落ですけど、新歓を見て入部した梓はやる気満々なんすよ。先輩たちだつてわかりますよね？折角”やるぞーっ！！”って入部したのに練習できないどどう思つとかくらい。第一、まだ梓は楽器にも触つて無いんすよ？俺に至つては入部して一週間以上たつのにどこやるかも決まって無いし」

「あ、そういうえばゆーくんどこやるか決めて無かつたね。あずにちゃんはギター持つてたからギターだとと思うけど」

「よおーし。それじゃあこれからコウがどこやるかを決め

」

「てる場合じやないんすよ！梓は掃除当番だつたからまだ来てないけど、もつすぐ来ます。俺のことはあとにして、まずは練習しないとダメっすよーー！」

「え～でもさあー・・・・」

と、俺の主張もお構いなしに田井中先輩がダレた。

「つちは真剣にこの部のことについて考えてるのに、いくら先輩でもいい加減に頭にくる・・・・・。

そう頭の中で俺の怒りが爆発しそうになつた時、それを見兼ねた

秋山先輩が俺より先に言い放った。

「いい加減にしろーー。」

その一言で先輩たちの顔色が変わった。
同時に、言いたいことを言つてくれたので俺の怒りも徐々に収まつた。

「結祐が言つてることはみんな分かるだろ！？梓だつてもう私たちに呆れてきちゃつてるんだ！今日こそ練習しなきゃ駄目だーー。」

秋山先輩がそう言ひきると、若干沈黙が続いた。
そこまで事が進行して俺は始めて気がついた。

先輩たちの築いてきた軽音部なのになんと書いて、俺メッチャヤ生意氣じゃね？

気がついた後は気が氣で無かつた。
もしかしたら言い過ぎたかも。

俺のせいだ先輩たちの仲が悪くなつたひどいよ。

短い沈黙の間にそんな事が頭の中に渦巻いた。

でも大丈夫だった。

俺の生意氣な言葉はキチンと届いていた。

「そうだな。澪とユウの言つ通りだ」

「私たちのためにも、あくにゃんのためにも頑張んなきゃねー。」

「私、今日はティーセットに触らないーー。」

「よーしーー！練習だーー。」

「！」
「！」
「！」

そう言つて先輩たちは準備しかけていたティーセットを片付け始めた。

その姿を見て俺は物凄くホッとしていた。

今いまの俺わたくしみたしな後こう輩ひか入いりてきたら俺わたくしは絶絶対たい嫌いやしになる。

そんなことを考えながら自嘲氣味に苦笑いしていると、秋山先輩が俺に言つた。

「ありがとうな祐祐」
「へ？」

言つてゐる意味が分からなかつた。それでも秋山先輩は続けた。

「結祐がいなかつたらきつと私たちは駄目なままだつたから」

「いやそこが無かったらいいが、和田先輩、おっつか俺、メチャクチャ生意氣だつたし……」

「え？ やつぱり印象悪かつたですか？」

俺のそんなマジの問いかけに秋山先輩は笑いながら、ちょっと上

から田線へほかへたしなへと述べた。

・・・やつぱ生意氣か。

「うう、俺はちょっと気を落とした。

すると、秋山先輩はそれを見てか、それとも本心なのか、それは秋山先輩を直視できない俺にはわからないが、こう付け加えた。

「でも、私たちには、私たちに氣を使わずに一番私たちのためになることを言つてくれる結祐みたいな後輩が必要なんだよ。少なくとも私は今のやり取りでそう思った」

その一言で、俺は目があつたわけでもないのに頭がぼーっとなつた。

その直後、言葉の意味がきちんと解読されとたんに恥ずかしくなつた。

何か言わなきゃとは思つたけど、言葉が出てこなかつた。

結果、硬直した。

そんな俺を平沢先輩が呼んだ。

「ゆーくん。澪ちゃん何やつてるの?早く練習しよつよ!」

「そうだぞ。練習しようつて言つた一人がこなくてどうすんだよ~

「『めん』『めん』すぐ行く」

秋山先輩はそう言つて、自分のベース、ギターを肩にかけ、定位置についた。

一方俺は、なんだかぼーっとしたまま先輩たちの前の椅子に座つた。

「1・2・3・4

」

その田井中先輩の掛け声で演奏が始まった。

だが、音楽は右耳から左耳へ抜けていくばかりだった。

それほどに、進路まで人任せにして適当に生きてきた俺の存在が必要とされたかもしれないという事実は、俺の心を揺さぶっていた。

?????

『ララ また明日』

と、丁度『私の恋はホーチキス』が終わった時、勢いよくドアが開いて梓が飛び込んできた。

そして、楽器を持つ先輩たちを見て一言。

「練習してる・・・・・!？」

「あたりまえだよあずにやん! 私たちは軽音部なんだもん! ふんすつ!!」

「昨日までお茶していた唯はいばれないぞ~」

「そ、そんなあ! ? そんな事言つならりつちやんだつて!!」

「私はいばつてないぞ!! と、そんなことは置いといて、梓もいつょにやろうぜ~」

そう田井中先輩に言われ、梓はうれしそうにギターを出した。

「さてと、そういうえば確認しなかつたけど梓はギターでいいんだよな?」

「はい! 唯先輩と一緒にです!!」

「それじゃあ、リードギターを決めないとな。どうちがやる?」

その田井中先輩の問いかけに、即座に平沢先輩が反応した。

具体的に言うと、田を輝かせて田井中先輩を真っ直ぐ見つめた。その田は、”りっちゃん私に…！”と訴えかけていた。

ま、先輩風でも吹かせたいんだろうな。

「…じゃ、唯でいいけど、一応梓の実力も見せてくれるか？」

「あ、はい。それじゃあ…」

そう言って梓はギターを肩にかけなおす。

そして、

（ ）（ ）（ ）

明らかに平沢先輩より演奏をした。

俺は何度か聞いたことがあるのでさほど驚かなかつたが、先輩たちは呆気にとられていた。

やがて、それに気がついた梓が慌てだす。

どうせ「（やつぱり聞き苦しかったかな…？）」などと焦つてんだろ。

明らかに梓のほうがうまいのに。

と、内心慌てているあるう梓を見ながら、俺にギターの道は消えたなど確信した時、やつと先輩たち戻ってきた。

「メチャクチャうまいじゃん！！」

「梓ちゃんすばらしい！」

「…・・・唯と同じ、もしかしたらそれ以上かもな」

「これは誰のと譲りを上げる必要があるな」

その田井中先輩の一言で全員の視線が平沢先輩に集中する。あ、立派なうする。

「えへと・。はうつ！…ぎつくり腰があへ・・・」「鬼苦しい（つす）」

俺と田井中先輩と秋山先輩の的確なツッコミが平沢先輩のハートをブレイクした。

「あずにや〜ん。ギター教えて〜〜！」

先輩としてのプライドは消え去つたらしい。

?

平沢先輩が泣きついたこともあり、今は個人練習だつた。言うまでもないが、平沢先輩は梓による個人レッスン中。

また、田井中先輩は走り気味になるのを直すために、琴吹先輩と練習中だつた。

こうなつてくると、ビニをやるかも決まつていない俺は暇人になつてしまふのだ。

そう俺が思つた時、秋山先輩が声を掛けてきた。

その瞬間に俺は目を逸らした。

「そういえば、結祐はどうやりたいんだ?」

「唐突ですね。まあ、どこでもいいんですけど、ギターは勘弁ですね。梓にや敵いつこないし」

「ははは。確かにそうだな。じゃあ、ベースやつてみる?」

「うーん。確かにベースもいりますね。でもドラムやキーボードも捨てがたいし・・・」

「そういえば、結祐つて音楽経験あるんだっけ?」

「無いっす。だから、どこをやるにしても時間はかかるんすよ」

「そつか。じゃあ、急がないでゆっくりやりたいところを探すと良いよ」

「そうですね」

そう言つて、俺は自分がベースやうたリズムやうたキー、ボードやうをやつてる所を想像した。

・・・似あわない、気がする。

そう苦笑いした時、ふと朝自分が言つたことを思い出した。

「あ、そういうの、俺やりたいとこありました。つか正確にはやれること」

「え? 結祐、何か出来るのか?」

「はい。俺、ヴォーカルやうと思つたんすよ」

「ヴォーカルつて、歌うのか?」

「はい。俺、歌うの得意つか、喉だけが自慢なんで」

「喉?」

「はい。まあ、言つより見せたほうがはやいっすね」

俺がそう言つて、秋山先輩は軽く首をかしげた。

ま、なに歌うのかとか、そんなこと考てるんだろ。

と、俺は頭の片隅で予想しつつ、こつもの様に声を出し始める。

「あー、あー、あー……」

その声は徐々に高音になつていき、

「あーいーうー・・・まあこんな感じか」

そして、俺は言い放つた。

『こんなにちわ。平沢唯です』

「……・・・・は?」「」「」「

自主練だったのに先輩たちの声が見事にハモつた。

とはいえこのリアクションは想定内。

だって、男の俺が”完璧に”平沢先輩の声を再現したんだから。

『これが私の特技です』

「ゆ、唯。今喋ったか?」

「ううん。私何も言つてないよ」

「じゃ、じゃあ遼。今の声は結祐から確かに出てたか?」

「うん。信じられないけど。はつきり結祐から唯の声が・・・・・

『す、じいでしょ~』

「「「「えー——つー?」「」「

またまた先輩たちのリアクションがかぶつた。
打ち合わせしてるんだろうか？

そんな事を考えつつ俺は声を元に戻した。
声を合わせるのは大変だが、戻すのは簡単なのだ。

「あー。直ったな。つーわけで俺の特技は『声マネ』です。まあ、
別に誰かの声を再現しなくても高音や低音を出すんすけどね」
「ゆ、ゆーくんス」「イ・・・・・」
「ほんとね～・・・・・」
「結祐・・・・すい」
「な、なあコウ。それって誰でも可能なのか？例えばムギとか」

そう田井中先輩からワクエストがあったので、俺は軽く発声し音
を合わせる。

・・・・・よし。こんなもんか。

『みんな～。お茶にしよ～』
「ムギだ！！」
「ムギちゃんそつくりだ！！」
「わあ 私にそつくり・・・・」
「ホントに凄いな。どうしてそんなことできるようになったんだ？」

秋山先輩がそう聞いてきたので、俺は向となく秋山>O>Oで
返してみた。

『お母さんがオペラ好きで、その真似をしていたらいつの間にか大
抵の声は再現できるようになったんだ』

「おお～澪の声～～」

「なんだか恥ずかしいな・・・でも、凄いな。真似してただけで自然にできたなんて」

『そつかな?』

「なあなあコウ。何でもいいけど、その声で『萌え萌えキコン?』つて言つてくれ!!」

「それ私も聞きたい!!」

・・・・・言えるか。

そう思つたが、田井中先輩と琴吹先輩の目が期待している。・・・
気がする（実際には見て無いから）。

まあ、どうせ秋山先輩の声だし、いいか。

そう思つて、

『萌えも

』

と言おうとした瞬間、

「やめてええええ!!!!」

という声とともに、俺は秋山先輩に取り押さえられた。
そして、当然の如く。

しゅうううう～～～～～・・・・・

シヨートした。

？？？？？

「ふうう。今日はしつかり練習したな～」

「そうだね、りっちゃん…」いつもの十倍は練習したね…「はあ～。指がもづくたくて」

そんなことを言しながら先輩たちは楽器を片付け始めていた。

まあ、西口も大分差し込んでいたし、練習終わるには良い頃合いだろ。

・・・後半あんまり練習してなかつた気がするナビ。

そう思いながら、俺も適当に荷物をまとめてこると、

「すいません。ちょっと、用事があるんで早く帰ります」

「ん? そつか。んじや、また明日な梓」

「じゃあね～あず【に】やん

「また明日～」

「じゃあな梓」

「はい。それでは

と言つて、梓が部室から出て行つてしまつた。

あいつどうせ用事なんか無いんだろうな。
そう思つた俺は梓を追いかけることにした。

直感でそうするべきと思つた。

「すいません。俺も帰ります

「そつか。んじやな～ユウ

「ゆーくん、ばいばい

「またな結祐

「また明日ね～」

「はい。んじや」

そう言つて、俺は部屋を後にした。

そして、先に帰路についている梓を追いかけた。

?????

「おい！梓！」

そう声を掛けられたのは学校から出てわりとすぐだった。
・・・結祐にまじうせ嘘ついたのばれてるんだらうな。

「はあ、はあ・・・。つたく置いてくなよ。せめて俺を待ってくれた
つていいだろ？梓が帰りたかったのも分かるけどさ」「ひ

「やっぱり気がついてた？」

「まあな。だてに幼馴染やつてねえし。それより、あの部には慣れ
たか？」

「ううん。微妙かな」

「まあ、そのうち慣れると思つた。俺みたいに
「そとかな・・・？（つていうか、慣れたくない）」

そんな事をついつい声に漏らしそうになつた時、結祐から思いも
よらない話を振ってきた。

「なあ、梓。好きな人いる？」

「ぶつ！－なんで急にそんなこと！？」

「別に大した意味はねーよ。ただ幼馴染として梓の恋模様は把握し
ておく義務が

「無いつ！－」

「ははっ。軽い[冗談だつて」

全然重たいよ・・・。

私はそう思いながら、今日を振り返つた。

今日は練習して、笑つて、笑つて、笑つて・・・・・・結局あんまり練習してない気がする。

「ねえ、結祐」

「なに?」

「結祐は何で軽音部を続けてるの? やる気の無い部なの? ・・・

そう言つてから、ははっと我に返つた。

私とんでもないこと言つてる!

そう思いながら恐る恐る私は結祐を見た。

すると、結祐はもともと私がそう思つていたのも、そんな事を聞かれることも見通していたかのように軽く微笑んで答えた。

「俺は、あのメンバーが好きだから」

「え?」

「やる気はねえし、お茶ばっか飲んでつけど、俺は引き込まれる演奏をするあのメンバーが好きなんだよ。理由はそんだけ」

「でも、ちゃんと練習しないんだよ? それなのに・・・・・」

「まあ、それはよくねえところだけ、俺はそれでもあのメンバーが好きなんだよ。きっと」

私には理解できなかつた。

結祐には誰にも負けないような声がある。

きつと外バンでも通用する。

なのに、たつたそれだけの理由で軽音部にいる意味が私には分からなかつた。

「梓には、ちよつと分かんなかつたかもな」

わう言つて結祐は一ヤツと笑つた。

結祐には何でもお見通しだつた。

「まあ、あんま考え過ぎたなよ。俺でよけりやあ何でも相談に乗るからよーんじやあな」

わう言つて、結祐は右に曲がつた。

その背中を私は見つめながら、思った。

結祐には私の事が見えるのに、何で私には見えないんだらう。結祐には、あの部がどう見えてるんだらう。と。

第八話　？新入部員？？？（後書き）

次回は・・・

『「」のままじや、来なくなつちやうかもしれないぞーー。』

『（なんだこんなやる氣の無い部にいるんだろ？）』

『それは先輩たちにしかできない。だから俺は

次回【新入部員？？】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7609z/>

K-ON <Backroom Story>

2012年1月5日23時47分発行